
月と潮騒

しばたや

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

月と潮騒

【Zマーク】

Z1989P

【作者名】

しばたや

【あらすじ】

海辺にある特別と言つほどの特徴のない村。

魔物から人々を守る役目を持った守人を父に持ち、その為に呪いを受けたと噂される少女・サラサ。

魔物との戦いで命を落とした少女の父に代わり、新しい守人として村にやってきた少女の幼なじみである青年・ザン。

両親の死と共に心を閉ざして生きる少女に、青年の思いは届くのか。

プロローグ（前書き）

初めて「」に投稿させていただきます。

まだ勝手がわからない新参ですが、お気づきの点がありましたらお知らせ下さい。

プロローグ

序

闇の中、音を立てて薪が爆ぜた。

ちりちりと、小さな火の粉が舞い上がる。

粗末な小屋、土間の中心、土を掘り石で組んだ囲炉裏で薪が燃えている。

囲炉裏の周りには食器が複数組と、織物の敷布。

遠く、波の音が聞こえる。

火の側には幼子を膝に抱いた女が一人。鉄の火掻き棒で火をかき混せて、新しい薪をくべる。ぱちりと音がする。

女の膝で、幼子は手の中のものを炎にかざす。

オレンジ色の明かりを照り返す珠。太陽の光の下で見たなら、月の光のようにほのかに輝く乳白色に見えただろう。

それは大粒の真珠だった。

「おかあさん」

舌足らずの言葉で、女の顔を見上げ尋ねる。

女は愛情を湛えた微笑みを返し、少し首を傾げてみせる。

「これはどうやってできるの?」

真珠を指でつまみ、女に差し出す。

「これはね

答えながら、幼子の指の間からこぼれた真珠を空中で受け止める。

「海の中の貝から採れるの

重ねて問いを投げてくる幼子の手に真珠を返して、そのまま幼子を抱いて立ち上がった女は、入り口に下がった織物をじけて外に出る。

晴れ渡つた夜空の中天に輝く満月の周りには、沢山の星々が華を添えていた。

「ほら、お月様はいつも、ああして私たちを、見ていてくれているでしょう? いつも空から見るとね、たまに、とっても哀しいものを見るときがあるの。そんな時お月様は一粒だけ、涙をこぼすの。その涙は海に落ちて、それを貝が大事に大事にしまっこむのよ」

幼子の手にある真珠は柔らかい月光を受けて、本来の輝きに近い仄白を見せてくる。

「これをおつねれおのものだから、じきなこおつねれおひいてるんだね」

今更ながら、面白げに真珠を手の中で転がしていた幼子は、ふと新たな疑問を口にした。

「なんで、かいはおつねまのなみだをしまこじむの？」

「やうね……」

しばし考へるよひな沈黙。

穏やかな風と波の音だけが聞こえる。

「じぼれた涙の理由を、忘れない為かもね」

女はやせしい溜息をついて幼子の尻を軽くポンポンと叩き、火の側へ戻つていった。

そんな親子のやうとつを、月だけが静かに見守つていた。

一章・少女と青年

1

初夏の日差しとはいえ、南国ではそれなりに強い。

夏の初めの太陽は、軽快で純白の光を、海に砂浜に注いでいる。やや変化に欠けはするものの、それなりに四季の移り変わりがあり、年間を通じて今が一番過ごしやすい。

日差しに負けず白い砂浜が広がり、エメラルドグリーンの海は、水平線に近づくにつれて紺碧へと変わっていく。

カニが波に追い追われしている波打ち際。人影が一つ。

透明度が高い為、実際よりも波打ち際が遠く見える海に、ボロ布を頭からスッポリと被った小柄な姿が立っていた。

太股の半ばまで海につかり、鍔を構えたまま、じつと海を見つめているようだ。暑いだろうに、執拗なまでに肌を見せないよつにボロ布を被っているので、顔どころか性別も窺い知れない。

見て解るほど小柄であるといふからすると、おそらく子供か女性

であろう。僅かに水面から確認できる太股が、抜けるように白い。

砂浜にしてはやや穏やかな波に揺られるように立っていたその人物の手が動く。

慣れからくる無造作さと正確さを併せ持つた鉤は、しっかりと大きな魚を捉えていた。引き上げられた鉤の先で暴れる魚から弾けた滴が、陽光を反射して輝く。

大きい。頭から尻尾まで、大人の指先から肩くらいはある。

その魚が刺さったままの鉤を担いで、ボロ布の人物は回れ右して砂浜に上がった。

水面からあらわになつていく足を、慎重に布で隠しながらである。見る限り、やや白過ぎはするかもしれないが、大きな傷もなく、足に目に見える問題があるとは見えない。

辺りの見える範囲に他の人影はなく、人目を避ける以外の理由があるようだつた。

そのまま、まっすぐ砂浜を突つ切り木陰までやつてくると、魚を地面に置き、無造作に足をかけて鉤を引き抜き、魚の首と尾に一撃ずつ入れ、血抜きをする。

「サラサ」

血抜きが終わるまでの間、ぼつとした雰囲気で海の方を見ていたボロ布の人物が、不意に背後からかかつた声に、警戒した様子で振り返った。

「よつ……その、久しぶりだな」

赤銅色に日焼けした顎の左側に縦の古傷が走った、精悍な顔立ちなのにどこか人の良さやうな青年が、少しきこちなく笑っていた。

気弱なわけではないのだろう。青年の引き締まつた身体からは、弱氣とは無縁の強い精気が感じられた。

「……だれ？」

青年に返されたのは、愛想も素つ氣もない冷ややかな少女の声。相手が嫌いだと、そういうこと以前に、本当に誰なのか判らないようだった。

つかの間寂しそうな顔をした青年は、それでも氣を取り直して言葉を重ねた。

「しようがないか、もう何年も会ってないからな。オレも背が伸びたし、多分印象も変わっただろ？」「……ザンだ」

「ザン……？」

訝しげに首を傾げた少女・サラサは、それが誰なのかすぐに思い至つたのだろう、ボロ布の上からでも判るくらい、はっきりと顔を背ける。

「……あんた、生きてたんだ。どうかで野垂れ死んだんだと思つてたわ」

砂浜の暖かい日差しとは対照的に、肌が泡立ちそうな程、せりて
冷たい声だった。

「今日、帰ってきた

「ここで退いたら、先はないと思ったのか食い下がるザン。

だが、サラサはまるでザンのことが見えていないよう、血抜きの終わった魚のエラに指をひっかけ、鈎を肩に担いでぐるりとザンに背を向ける。

「サラサー！」

その背を追って、歩踏み出しつとしたザンに、ぴたりと鈎の先端が突きつけられる。

「一つだけ言つておくよ

吹き抜ける潮風が、サラサが被つたボロ布を揺らす。

ほんの一瞬垣間見たのは、ザンを睨みつける血色の赤い双眸。

「あたしに関わるな

斬りつけるような口調で言い捨てて、拒否の意志を漲らせた背中を向け歩き去る。

ザンは、サラサの小さな背中が見えなくなるまで、ずっとそこには立っていた。

波の音と、濃い潮の香りを含んだ風が吹き抜けた。

2

そこは海の近くにある村だった。

それなりに村としては大きいものの、取り立てて近隣の村に比べ特産品があるわけでもなく、よくあるような村と言つていいいだろ。村の近くにある岬にちょっとした伝説があつたり、風光明媚な景色も多いが、それとて特別珍しいというほどのものではない。

ザンの生まれ故郷であるその村は、人口約二百人。やや田舎臭くはあるが、長所がない代わりに、イヤなところもない。

ザン自身には含むところも思つところもあるが、それでも久しふりの帰郷ということになれば、感慨もある。

直接帰つてくるのは実に七年ぶりだ。それだけ時間がたてば、いくら田舎だらうと風景も変わる。変わらないのは、風景だけだ。

いや、変わつてゐるのだらう。変わらなく感じるのは、多分に感傷が混じつてゐるからか。

昔には、あんな連中いなかつたはずだしな。

村のほぼ中心にある、集会場を兼ねた広場にさしかかったザンは、そこでたむろするあからさまに人相の悪い三人組を視界にとらえて溜息をついた。

ザンに見覚えがないということは、流れ者か随分昔に村を出た出戻りだらう。

その連中がザンを見つけ、見るからに因縁をつけてくるつもりで近づいて来るのを眺めながら、さらにもう一度深く溜息をついた。

「おう二イちゃん、二二二二辺じやみねエ顔だな？」

一番先頭の無精髭の男が、陽もまだ高いといつのに酒臭い息を吐きながら、柄の悪い態度でザンをじろりと睨めつける。

「まあそうだらうぞ、たつた今帰つてきたばかりだからな」

サラサとのやりとりはついさつきのことだ。ザンは好んで他人に喧嘩を売るほど好戦的な人間ではないが、さすがに多少気分が荒れていたのだろう。

「言ひてから、しまったなと思ったが後の祭りだ。

「てめえ、口の利き方を知らねえみてえだなあ！」

案の定、一瞬で頭に血を昇らせた無精髭の男が、ザンの胸ぐらに掴みかかる。

ザンは顔色も変えずに、掴んできた右手首を掴み、同時に強烈な足払いをかけた。

素早いが、あまり力を入れて蹴つたように見えない足払いは、喰らった男をザンに掻まれた右手を中心にくぐりと回転させた。

重力を無視して、間の抜けた無精髪の顔が上下逆になる。

そのまま頭から地面に落ちそつになったところを、ザンが男の首につま先を引っかけて、頭から叩きつけられるのだけは回避せざる。

どしゃ！ と男の体が地面に落ちる。

頭から落ちるのだけは逃れたが、結構な勢いで叩きつけられた男は、ひとつ呻いて動かなくなつた。

あまりに鮮やかなザンの手際に、残つた二人の男は怒るよりも先に呆然となつてしまつた。伸びてしまつた男に駆け寄ることもせずに、立ちすくむ。

ちらりとザンが目を向けると、特に睨んだわけでもないのに、エビのように慌てて後ずさる。

そのみつともない姿に、下らない事へ関わつてしまつた自己嫌悪も併せて、ひどく虚しい気分になり、ザンは無言で歩き出した。

男たちはそれを遮りもせず、さらに慌てて道を空ける。

しばらく歩いたところで、ザンの背中に罵声が浴びせられた。一応振り向いてみると、一人がかりで伸びた男を抱えて、男たちが逃げていくところだった。

つまらないものを見たとばかりに鼻の頭に皺を寄せ、ザンは広場に面した他の建物とは雰囲気の違う一軒家にむかう。

「婆様、いるか」

ドア代わりの複雑な柄の織物をくぐり、声をかける。

「いるよ。入つておいで」

しわがれた声がすぐに返ってきた。

促されて中に入ると、薄暗い内部は外と隔絶されているかのようにヒンヤリとした空気が満ちていた。

その中心に据えられた小振りな卓の向こうに、黒い紗のショールを被った老婆が座っていた。その目の前には、琥珀に似た半透明の珠が、青い袱紗の上に鎮座している。

「直接会つのは久しぶりだね。いい男になつたじやないか

いくつか歯の欠けた口元を緩めて、老婆は孫を見るような笑顔を浮かべる。

「確かに身長は伸びたけど、中身はどうだかな

ザンも笑顔を返しながら卓に近づくと、老婆の正面に座る。

「免状は？」

尋ねる老婆に、ザンは懐から封蠅をされた封筒を取り出して渡す。

懐から取り出した小刀で封蝋を破り、中の書類を取り出して一通り眺めた老婆は、ザンに目を戻して、また笑みを浮かべた。

「大したもんだね、あんたは」

卓の上に封筒と書類を重ねて置き、両手を組んでそこに顎を乗せる。

「あなたの望み通り、アタシの知つてる限りで一番厳しい師匠のところに放り込んでやつたつてのに、ちゃんと免状もらつてきたとはね。結構本気で、すぐに逃げ出すだらつと思つてたんだがね」

「何回か死んだと思つたけどな。逃げたところで、どうなるわけでもなし」

「ちゃんと？^{もりびと}守人？の委任状も持つてきたね。よしよし」

頷いて立ち上がった老婆は、部屋の隅にある行李を開けて、中から一振りの長剣を取り出した。比較的新しい革の鞘に収まつた剣の、細かい彫刻が施された鍔には、卓の上の珠と同じ輝きの宝石がはめ込まれている。鞘に比べて、剣本体は随分使い込まれた雰囲気で、歴戦の傷が散見できた。

「ここの剣は身分証明を兼ねてる。鞘と柄巻きは新しくしといたよ、大事に使いな」

「……ああ」

神妙な顔で両手を差し出し、大事そうに受け取つて感慨深げに目

を閉じた。

「や、これであんたは」の村の守人だ。精進おし

よつこりしょ、と声をかけて卓に着いた老婆は卓上の珠に手をかざして訊いた。

「せつかくだ。あんたの運勢でも占ひやうつか?」

「いや、それよりも、オレが村を離れていた間の話を聞きたい」

「……もつさりには会つてきたのかい?」

「顔も見せてくれなかつたし、話もできなかつたけどな

「まあ、やうだらうね。お前さんなら、話へりこできるかと思つたんだがね」

ふーーっと、長く溜息をついて老婆は天井を見上げる。

「前から大して村の連中と仲が良かつたわけではないんだが、母親が死んでから尚のこと頑になつちまつたからねえ。仕方がないとは思うが。アタシが仲介できれば良かつたんだが、アタシら詠人は中立の立場を守らなきゃいけない撻だ。……薄情だとは思うがね」

「オレが血反吐はっていた間も、状況を送つてきて貰つてたからな。オレにとつてはそれで十分だつたよ」

「あんたに対してはね。あの娘に対しては義理を欠くにも程があるさね」

自嘲的に肩をすくめた老婆は居住まいを正して、口を開く。

「幸い、ここ何年かは凶作も魔物の襲撃も無かつた。あの娘の母親が死んだ流行病の時も、さほど広がらずに済んだからね。さすがに昔の一件は、連中も罪悪感があるんだろうな。ほとんど騒ぎもしなかつたよ」

「…………」

「そんな調子でね。今、村でまともにサラサが相手するのはナオだけだ」

なんとなく、場が湿っぽくなってきたのを感じたのか、ザンが話を変える。

「さつきすぐそこで、三人組のチンピラに絡まれたんだけど、あいつらめ？」

「ああ」

鼻の頭に皺を寄せて、老婆は嫌悪感をむき出している。

「最近村に戻ってきたロクテナシビモガ。ここがイヤで出ていったくせに、都會でなにか失敗したんだか犯罪でも犯していられなくなつたんだか。出てったのは十年以上は前の話だから、お前さんには見覚えが無いかもね。村の連中はあんなんでもなにかあつたら役に立つんじゃないかと思つて放置してゐみたいだがね」

「たつた今、人目のあるところで伸してきたばかりだから、役に

立たないって話はすぐ口にすると思つた

わざと口にしたザンに、老婆は声を上げて笑つた。

「そりや良い薬だね。周りが黙つてゐのを良いことに、かなり好き勝手してたからね」

「戻つてきた早々、買わなくてもいい恨みを買つた氣もあるけどな」「なに、連中は根っからのチンピラや。ガシンとやられたからって、やり返そつてほどの根性は無いだらうや。魔物と戦うのが仕事の守人相手に喧嘩売らうなんて、多少はまともな頭があれば考えないだろうよ」

「だといいけどな」

「じゃ、話のついでだ。坊やの修行の成果を見せてもりおつかね」

楽しそうに言つて老婆が卓上の珠に手をかざすと、室内の闇が濃くなつた。

一瞬バツの悪そうな顔をしたもの、ザンは立つたまま黙つて両手を宙に差し出す。

ふーーとザンが息を吐くのと同期して、両手のひらに陽色をした燐光がうつすらと見え始めた。

「以上」

ザンが早口に言つて両手を広げると、あつとう間に両手の燐光

が書き消える。

「なんだい、そんなもんかね？」

拍子抜けした口調の老婆に、子供のよつこ口を尖らせてザンは言い訳する。

「無茶言つなよ。十年修行したって、キラとも破魔の光が出ない奴だっているんだ。師匠みたいに、部屋中照らすみたいな真似が、先はともかく免状貰つたばかりのペーペーにできるわけないだろ」

「ま、そりゃそつかね」

あつせつ言つて、再び老婆が珠に手をかざすと、部屋に明かりが戻る。

「その程度でも武器に通すに十分だらうから、問題は無いかね。そういうや、家には顔を出したのかい？」

「……出でなれや、駄目かな？」

「そりやね。あんたが村を出たときには、村長には散々文句を言われたからね。あんたも少しは言われてきな」

「ザンが帰つてきのつて？」

意地悪く老婆が笑つたところで、勢いよく入り口の織物を跳ね上げて、小柄な人影が飛び込んできた。

「なんだい、はしたない！」

間髪入れず老婆に一喝されて首を竦めたのは、ザンと同じくらい
か少し下の年頃で、小麦色の肌が健康的な少女だった。

「あう。『めんなさい、ババ様。ザンを見かけたって話を聞いて、
ここにいるんじゃないかつて……』

「相変わらず元気みたいだな、ナオ」

「ザン…」

しおらじくしていたのはほんの一瞬で、ザンの姿を視界に納めた
ナオは、跳ねるようにザンの胸に飛び込んだ。

「帰ってきたのね！」

「おう、でつかくなつたなあ。オレが村を出た頃は、あんなチビッ
子がつたのに」

微動だにせずナオを受け止めたザンは、片手でナオを支え、もう
片手で小さな頭を撫でた。

「あたしだつて、もう十六なんですからね！　いつまでも子供じゃ
ないんだから！」

「あつはつは。そりや悪かったな

頭を撫でる手を軽くのけて、可愛らじく頬をふくらませるナオに、
親しみ深い笑みを見せながらザンは老婆に顔を向けた。

「んじゃまあ、親父のところに顔出してくれるよ。多分大喧嘩になるとは思つけど」

「そこいら辺は、あなたの家の事情だからね。好きにするとこころ」

意地の悪い笑みを浮かべて頷く老婆。

「じゃあ、あたしが案内するね」

「終わつたら、一度こっちに戻つてきなよ」

村出身のザンに案内などいらないだろ、といつも野暮も言わない老婆に見送られて、ザンとナオは老婆の小屋を後にした。

「オレがいな間、サラサの面倒をよく見てくれてたみたいだな。ありがと」

並んで歩きながらザンが礼を言つと、ナオが不思議そうに首を傾げた。

「サラサは友達だもの。なんで、ザンがお礼を言つの？」

「いや……」

心底不思議そうなナオに奇妙な違和感を覚えたものの、そのまつきりしない感覚を問いただせるほどの確信が無かつたザンは適当に言葉を濁して、話題を変える。

「婆様の手紙に書いてあつたけど、詠人の勉強してるんだって？」

「うん。 そのうち、王都へ留学することになるんじゃないかな。 えへへ、詠人になつたら、ザンと一緒に仕事できるかもね」

「EJの村には、婆様がいるだろ」

冷静なザンの言葉に、ナオが口を尖らせる。

「婆様もお年だし、引退もそつ遠くないと思つわ。 そつなつたら、あたしがなつてもいいじゃない」

「あの婆様が簡単に引退するか？ あの人、オレらが子供の頃から変わらないけど、ちゃんと年取つてゐるのかね」

そんな他愛のない会話を交わしながら歩いてくると、すぐに周辺では一番大きな屋敷へと辿り着く。

「じゃあ、また後で来るから、おじさんと仲直つしておこでね」

「簡単にこつなあ……つか、多分仲直りなんかできねえと思つけど」

顔をしかめた言葉の後半は、踵を返して走り出したナオには届かなかつたようだ。

多分、改めて言い渡されそうな気がするが、そうなると寝泊まりするアテが無いことに今更ながら気がつく。 村長の意向に背いてまで、手を差し伸べる者はいないだらうし、

ザン自身もその程度の事で他人に迷惑をかけたくない。

「まあ、野宿でなんとかしのぐか」

重い足取りで、ザンは屋敷の門をくぐつた。

「今更どの面下げて帰つてきた」

六年ぶりに再会した、村長でもある父親からの第一声はそれだつた。

はつきり言つて、郷愁に駆られて帰つてきたわけではないので、特別怒りも失望も湧かなかつた。

久し振りに見た父親は、少し老けて見えたが、その中身は別れた時から何も変わっていないように感じた。指導者というのは安定感も求められるのだろうから、変わらないというのも役割的美德なのかも知れないな、と顔を背けて怒りを見せる父の顔を、冷めた頭でぼんやり眺めた。

母親が一步下がり、時折取りなし口を挟むが、大して効果を上げてはいないようだ。一通り言いたいことは言つてしまつたのか、父親は最後の一言を発した。

「この家にお前の居場所などないぞ！」

「別に構わねえよ。オレは守人としてこの村に戻ってきたんだ。最初からこの家に戻ってきたわけじゃない。新しい守人として、村長サマに挨拶に来ただけだ」

思つてもいなかつた発言だったのか、父親は鼻白んだ表情で一瞬

黙り込み、ザンの傍らに置かれた長剣に初めて気がついて顔色を変えた。

「お前……」

「やうじごうじことだよ。お互い顔を合わせて楽しいわけじゃねえだろ。なんかあつたら、婆様を通してくれ。じゃあな」

絶句している父親をおいて、やつれと立ち上がるザン。田の端でオロオロしている母親も見えないふりをして、そのまま家を出る。

「さて、今晚からどうするかなー……」

頭を搔きながら、ぶらつとザンは歩き出した。

3

その頃、サラサは浜辺まで戻つてきていた。

間の抜けた話だが、先ほどは思わず再会をしてしまったせいで、待ち合わせの約束があつたのを忘れて立ち去つてしまつたのだ。

一応、まだザンが居残つてないのを確認しつつ、どこか慎重な野生動物のような雰囲気で、日陰を選びながら大きな木の下までやってくると、ボロ布の裾を払つて腰を下ろす。

陽の高さを確認すると、約束の時間を少し過ぎてこるようだが、辺りには約束相手の姿は見えない。相手の性格からして、先に来てしまい、サラサがないからといってすぐに帰つてしまつとは考えにくいで、おそらく遅刻しているのだらう。

別に急ぎの用があるわけでもないサラサは、木の幹に背を預けて海を眺めつつ待つた。

白く青く姿を変える波は、飽くことなく、絶えることもなく繰り返し寄せてくる。

眼を閉じれば、潮騒だけが耳の奥をくすぐる。

優しいその音に身を任せていると、そのまま世界に溶け、薄れて消えていくような感覚に陥っていく。

そのまま身体が溶けて、消えてしまえばいいのに。

優しい感覚とは裏腹に、思い浮かべるのはやんなこと。

意識を他に移そうとしても、辛いことしか思いつかない。

楽しい思い出もあるが、それを塗り込んでしまつほどのは、哀しい思い出ばかり。

潮の香りを含んだ柔らかい風が、田先の布を揺らす。

なぜ、生きているんだろう。

泡のように意識に昇つてくる思い。

自分を愛してくれた両親は、もうこの世にはいないの。」

辛いのに、悲しいのに、なんで今こじこじるんだろ？

取り留めのない思いは、堂々通りを繰り返し、霞のように消えていく。

やがて、新たに浮かんできたのは、顎に古傷のある浅黒い若者の顔。少年の頃の面影を色濃く残していた顔。

布の下で、サラサは顔を歪めた。

何で今更。

全部、心の中に押し込めて忘れたつもりだったのに、思い出しちゃった。

その顔は、サラサがどんなに努力しても、脳裏から離れてはくれなかつた。

薄汚れた布の下でサラサがどんな顔をしているのか。

辺りに人影はなく、物言わぬ木々ときらめく太陽の光だけが浜辺に踊り、潮騒が辺りを満たすのみ。

休み無く波が打ち寄せる。

「ゴメンね、遅れちゃって。待ったでしょ？」

どれだけ時間が経つたのか、サラサには聞き慣れた声が黙想を破る。

顔を上げると、健康的に日に焼けた可愛らしい顔が笑いかけていた。

「急な用事ができてね。ちょっとバタバタしちゃった」

「別に急ぎでもないから、気にしないでいいよ」

ザン相手の時とは全く違い、親しみの深い声で返し、サラサは居住まいを正す。

「じゃあこれ、今回の品物ね」

サラサに笑顔を向けて、ナオは肩に担いだ背嚢を砂の上に下ろした。

「……いつもありがとうございます、ナオ」

「なに言つてゐるの、あたしたち友達じゃない。遠慮なんてしないですよ。それより、荷物の中身確認しなよ」

「うそ」

サラサは素直に頷いて背嚢を引き寄せると、中身を一つずつ取り出していく。次々と油紙の包みや紙束、丸めた布などの雑貨が取り出される。

それらは、どうしても自給自足の利かない諸々の生活必需品だつ

た。

一つ一つ丁寧に吟味して、また元通りに詰め込む。

「確かに。それじゃあ、これね」

隣に座り込んで作業を眺めていたナオに、サラサは小さな革袋を差し出した。

黙つてそれを受け取ったナオは、袋の口を開けて中から一つを摘み出した。

「うわ～～、今回のもかなり質がいいねえ」

日の光を淡く照り返すそれは、大粒の真珠だった。袋の膨らみを見る限り、同じ程度のものがもつと詰め込まれているようだ。

摘んだ真珠をかざしてみながら、ナオは感嘆の吐息を漏らす。

「よくこんなのが見つけられるよね。村で腕のいい人でも、こんな立派なやつ探つてくることなんて滅多にないよ？」

「人魚岬の辺りには誰も潜らないから。わたし一人が探るくらいなら、いくらだつてあるよ」

「せついいえばさ、昔からあそこには人魚が出るつて聞かされてきたけど、見た事つてある?」

「はつきりと見たことはないけど、ひょっとしたらあれがそつかな? つていうのなら、何度か見かけたことはあるよ」

「ほんとうに？..」

「気のせいかもしねないけどね」

「この辺りの子供なら、必ず聞かされるおとぎ話について一通りの雑談を交わしたところで、ナオがはたと膝を打つた。

「あ、そうだ。前から言おうと思ってたんだけど、真珠の代金、毎回随分余るよ？ もっと他に何か欲しいものあるなら、色々買えるけど。いつも手数料とかいてあたしにくれてばっかりじゃなくて、貯めるとか」

ナオの提案に、サラサは黙つて首を横に振った。

「いいよべつに。自分ではお金に換えられないし、貯めたところで使い道もないし。それより、ナオの方が勉強の為に本を買つたりしないといけないから、物いりでしょ。ナオが役に立ててくれれば、わたしも嬉しいからわ」

他の誰にも見せない優しい表情で、ナオの提案をやんわりと断る。

「ん~……。でも、なにか欲しい物があったら、いつでも言つてね。じつちでお金貯めとくから

納得いかない様子ながらもナオがそう返すと、サラサは笑つて頷いた。それを見たナオが、不意に何かを思い出した様子で両手を叩いた。

「あ！ そうそう、そういうえば！ 聞いてよサラサ、ザンがね帰つ

てきたのー。」

「……ふうん」

一瞬判断に迷った感じで間を開けて返事を返す。だが、その間の意味にナオは気がつかなかつたようで、気のないサラサの返事に頬をふくらませた。

「ふうんって、それだけ？」

「それだけ？　って言われてもね…………」

「だつて、ザンだよ？　八年も村にいなかつたザンが帰ってきたんだよ。新しい守人になつて！」

今度こそ、見て解るほどサラサが動搖を見せたが、それでも興奮しているナオは気がつかない。サラサはすぐに動搖を引っ込めると、また冷たく淡泊な反応を返す。

「……へえ

「へえって、あのねえ」

「だつて、わたしは村に行く用事ないから顔を合わせる」ともないだろうし。関係ないもの」

「なんで村にこなつて断~~離~~するのよっ」

ますます頬をふくらませるナオに、笑いを含んだ声でサラサは言った。

「ナオに、迷惑かけたくないから」「

あつせつと返す言葉に、頑固な意志を感じて感じて、ナオは言葉に詰まる。

じぱりぐ、むずがる子供のよつに握り拳をバタバタ振っていたナオは、ややあつて右手を砂の上についた。

「うへへ、でも、あたしの結婚式の時には、ちゃんと村まできてね！」

「結婚？ ナオ、結婚するの？」

突然振られた話題に、サラサが驚きの声を上げる。

それほど頻繁とは言えないものの、それなりの頻度で顔を合わせているが、そんな話は一度も話題になつたことは無かつたからだ。

サラサの驚きに満足したのか、ナオは恥じらいに染まつた頬に手を当して頷いた。

「うん。まだ正式に決まったわけじゃないんだけどね

「そりなんだ。おめでとう。それで、相手は？」

「あのね、ザンとなんだ

「え……？」

予想もしなかつた名前に、サラサはボロ布の内側で硬直するが、やはりナオは気がつかず嬉しそうに続ける。

「何年か前に、ザンの消息がわかつた頃から、話があつたんだって。お父さんたちの間ではほとんど決定みたいなもので、後はザンに話をするだけだつて。あたしも、つい最近聞いたばかりで驚いたんだけど」

「……ナウ」

見事なまでに感情の消された声だつた。それをサラサの感心の無さと感じたのか、ナオは膝を寄せてサラサの手を取つた。

「だから、ね？　お願いだから、そうなつたらサラサもちゃんと来て欲しいの」

「……考え方

やはりといふか、あまり色のいい返事ではないことに、ナオはやや不満そうだつたが、今はそれでいいと思つたのか、本当にお願ひね、と念を押して立ち上がつた。

「そんなわけで、今日はちょっと忙しいから、これで帰るね

「うん……」

「またね」

手を振つて去つていいくナオに、サラサは軽く手を挙げて答える。

ナオの背中が見えなくなるまで見送り、溜息を一つつ立て上
がる。

しばらくまうつと水平線を見つめたまま、サラサは波の音を聞い
ていた。

別に隠すほど の事ではなかつたはずだが、ザンがサラサに会いに
来ていたのを、ナオに伝えそびれてしまった。

なんとなく居心地の悪い罪悪感があつたが、いましがたに聞いた
話と一緒に腹の奥に押し込めて、それ以上考えないことに決める。

歩き出したサラサが踏みしめる熱砂は、革のサンダル越しでも酷
く暑かつた。

4

勢いで実家を後にしたもの、特に行く当てを決めていたわけで
はないザンは、村の中を適当に歩き回っていた。

特にあてもなくぶらぶらと歩きながら、ふと父親の事を思い出す。

久し振りにあつた父親は、記憶にあるよりも随分小さかったよう
な気がする。

考えてみれば八年前に村を飛び出してから、ザン自身がもっとも

心と身体の成長著しい期間を離れて過ごしたのだ。身心共に、変化を感じて当たり前だ。

覚えている昔の父は見上げるよう大きかったし、村長という責任ある立場にあるせいか、威厳があつたと思つ。

だが、今日見た父親は、身長そのものはザンより頭半分低かつたし、白髪も増えて年寄りめになっていた。

ザンが成長した分、父親が年をとった。それだけのことだ。

正直に言つて、ザンは父親が好きではなかつたが、それでも記憶の中にいるのとは違つ父の姿に、言いようのない寂寥感を感じたのも事実だつた。

毎をじぐりか過ぎたぐらいの時間である。

日差しの強い時間帯には、村人は屋内で仕事をしているか、夜の漁に備えて休んでいるかのどちらかで、嵐避けの石垣に沿つて踏み固められた道に人影は無い。

もう少し話してきても良かつたかな。

ほんの少し後悔しないでもないが、やはりすぐに切り上げて良かつただろつと思い直す。どうせ、多少長く話したとしても最後には喧嘩になるだろつ。

いろんなものが変わったのに、変わらないものもある。

変わらなければいけないものほど変わらず、変わつて欲しくない

ものほど駆け足で変わっていく。

父は後悔していないのだろうか。

いや、例えしていたとしても、認めはしないだろ？

立場もある、守らなければならないものもある。罪悪感など持っている余裕などないのかもしない。

責めるつもりは不思議なほどザンには無い。だからといって、積極的に認めるつもりも無い。

昔、村を飛び出した時は父親に対して怒りしか持つていなかった。

怒りはもちろんいまだにあるが、それよりも深くザンの心を支配しているのは、哀しみと寂寥感だった。

つらつらと考えながら坂を上ったザンの眼に、屋根だけがある作業場から立ち上る仕事の煙が見えた。

そこで作業している人物を田にとめたザンの顔が明るい表情に変わり、ザンはその作業場に向けて足を速める。

やがて見えてきた作業場は、突き固められた黒い土が剥き出しで、ぱっと見で粗末な印象を一瞬受けた。

だが、使い込まれた火床^{ヒカル}にフイゴ、年季の入った金床。必要なものが必要なところにある、洗練された仕事場だというのは部外漢のザンでも見て取れる。

その中心、横座と呼ばれる浅い穴の縁に腰掛け一心不乱にヤスリを使っているのは、ザンと同じ年頃の丸顔に無精髭が生えた中肉中背の男だ。

余程作業に熱中しているのだろう、見通しのいい作業場だといつに、ザンがすぐ側までやってきても顔を上げない。

「忙しそうだな、ブギ」

「ん?」

ザンが親しげに声をかけて、ようやく顔を上げる。

「ああ。なんだ、ザンか。ちょっと待ってろ、一段落つけちまうから

村を出て以来、手紙のやりとりはしていたが、直接顔を合わせるのも八年ぶり。今日戻つてくるのも伝えてなかつたはずだが、まるで昨日別れたらばかりのように平然とした対応でザンは苦笑いする。

しばらく黙つてブギが作業を待つ。

金属が金属を削る音だけが少しの間続き、やがて手を止め、削っていた鉛にまとわりつく鉄粉を吹き飛ばし、角度を変えて何度も確認してようやく満足したのか、地面に敷いた革の上にポンと鉛とヤスリを置いたブギが横座から立ち上がる。

「待たせたな」

「もうひとつ感動してもらえたと思ったんだがな」

「うわあ、久し振りだなザン！ 元氣で何よりだ！ 感動した！」

あからさまな棒読みで、大げさな身振りをつけて言つブギに、ザンはさらに苦笑いを深める。

「変わらんな、お前は」

「まるつきり音信不通で、完全に行方不明だったてんならともかく、この前守人の資格をもらつたって手紙寄越したじゃないか。だったら、すぐにでも帰つてくるって予測ぐらいつくぞ。ま、とりあえず」

親愛の笑みを浮かべたブギが鍛冶仕事で鍛えられた手をザンに差し出した。

ザンがその手をとる。

「おかえり」

「ただいま」

誰よりも会いたかった相手に、両親にも言つてもうえなかつた言葉に、ザンは少し複雑な表情を浮かべる。

ブギが空いた方の手で、ザンの肩を優しく叩いた。

「しかし、本当に守人になつて帰つて来るとはなあ

村名産のクセの強い果実酒が満ちた杯を傾けて、ブギがしみじみと口にする。

陽はかなり傾いてきたものの、まだ暗くなるには間がある。

作業場の片隅に、小さな作業台と、長方形の板を使ってでっちは上げたテーブルの上には何種類かの料理が並べられている。

酒を飲むにはやや早い時間ではあるが、ブギは暗くなつてから火入れの作業がある為、早い時間からの酒宴になつた。

「昔つから、妙に頑固なところのある奴だと思つてたけど

やや赤みの差した顔で、腕組みをしながら何度も頷く。

もともと人懐こい達だが、適度に酔いが回つてきたおかげで、さらには陽気になつてくる友人を微笑ましく思いながら、ザンが訊ねる。

「そういうや、親父さんはどうしたんだ？」

「オレに鍛冶仕事を譲つて、村の反対側に家建てて、魚採つたり畠耕したりでのんびりやってるよ。別にオレは同居でも良かったんだがな」

「新婚だから氣を遣つてくれたんだろ。手紙で聞いてはいたが、どうぐらいたつんだっけ？」

「三ヶ月かな」

酒の肴をもう一品持つてやつてきた、やや地味だが健康的に日焼けし、育ちの良さそうな妻から肴を受け取るブギ。夫婦共に幸せそうな雰囲気に溢れていた。

母屋に戻つていく妻の背中を眺めて、ブギはザンに田を戻した。

「で、お前さん修行つてどんなもんだつたんだ？ 噛じやとんでもなく厳しいらしいじゃないか、守人の修行つていうのは

「何度か死にかけたけどな」

修行の日々を思ひ出して、ザンはうんざりと溜息を吐いた。

「陽が昇る前に起き出して、朝飯まで延々と走り込みから始まるだろ。一応三食は出るんだけど、それ以外の時間は大きさでなく全部基礎鍛錬。それがまず四年続いたな。同じ時期に弟子入りした連中は、大半ここで挫折したよ」

「基礎鍛錬つてのは？」

「まあ体力作りと、剣術の基本、素振りつてとかな。そればつかりやらされた」

ブギから杯を受けて、話を続ける。

「何回やつたら終わらつてんじゃなくて、できる限りやらないといけないんだ。楽しそうとするとあつさつ師匠にバレるんだけど、別に怒りもしないで『出て行け』って言つだけなんだよな。それが怒られるより恐ろしくて、夢中でやつたなあ。でも面白いもんと、調子が悪くて数がこなせない時には何も言わないし、怪我したり体調

を崩した時には、しっかりと治療をしてくれたんだ。こっちが必死にやつてる限り、決して雑に扱つたり見放したりはしない人だつた。取りあえずの修行が終わつたから言えるのかもしれないけど、いい師匠だつたんだと思うよ

くつと杯を傾け、ブギの杯にも酒を足してやる。

「それから、基礎鍛錬が充分と判断された奴から『破魔の光』を練る為の修行に入るんだ」

「守人になる為の最低限の条件だつたっけ？」

「ああ。守人の総数がそれほど多くないのは、『破魔の光』を身につけるのに多少の素質が関係するのと、その修行の過程で命を落とす確率が少くないからなんだ」

ブギが料理を小皿に取り分けて差し出すのを受け取り、ザンは料理を一口放り込む。

「ハナから手加減を母親の腹に置き忘れてきたんじやないかと思うような人だつたけど、師匠の指導はさらに激烈なものに変わつてなあ。……オレ、本当によく生きてたな……」

なにやら遠い目になつてしまつザンだつた。

「確か婆様の紹介で弟子入りしたんだよな。ビームもそんな厳しいもんなのか？」

「いや、俺が頼んだんだよ。一日でも早く村に戻つてこれるようだ。……まあ、後悔しなかつたかというと、微妙だよな」

苦笑いして空になつた杯を手の中で転がす。

「でも、オレはやり遂げた。やり遂げて、帰ってきたんだ。今度は、あいつをあんな目に遭わせない。オレがあの人の代わりに、あいつを守るんだ。絶対に。……もう、泣くだけだったガキじゃないんだ」

無意識に力がこもつた手の中で、焼き物の杯が微かに悲鳴を上げた。

「あんまり力を入れるなよ？ 杯が碎けちまう

「お、ああ、と。すまん」

慌てて手から力を抜く幼なじみを優しい目で眺めつつ、酒を注ごうとしたところで、酒瓶が空になつていてことに気付く。

母屋に追加を取りに行こうとブギが腰を上げると、ちよづき妻が新しい酒瓶を持ってくるところだつた。

「今日は氣前がよくて、なんだか後が怖いな」

ブギが立ち上がり笑顔で酒瓶を受け取り、戯けて言つと。

「失礼ね、なんだかいつもは氣前が悪いみたいじゃない。久し振りの、お友達との再会でしょう。野暮なことは言わないから、今日は楽しむといいわ」

「ありがとう、ヨナ、愛してるよ」

「調子いいわね」

片手で腰を抱いてわざやくと、浅黒く日焼けした顔に微笑みを浮かべ、ザンにも黙礼を送つてまた母屋へ戻つていぐ。

「お前、よく恥ずかしくないな」

「なにを。愛し合つて結婚したんだ。愛をわざやくこと、なんの抵抗があるか」

多少呆れた調子でザンが言つと、やうそろこい具合に酔いが回つてきたか、ブギは笑いながら大仰に両手を広げた。

「ま、実際いい女だよ。俺の道楽に文句一つ言わないし、料理もこの通り美味しいしな」

「そりゃわかるけどな。どうやって知り合つたんだ？ 見覚えがなければ、この村の出身じゃないだろ」

卓上の料理に手を伸ばしながらザンが訊ねる。

「見合ひだよ。隣村の出身や。やつこや」

ブギはストンと席に座り直して正面からザンを見据え、酒を注いでやりながら真顔で切り出した。

「お前、ナオと結婚するつて本当か？」

「は?..」

驚いた拍子に手元が狂い、杯から酒が溢れる。

「なんのことだ、それ？」

「ああ、やっぱりお前は知らない話なんだな。なんかお前の親父とナオの親父が、少し前から準備を始めたとか聞いたんだが、おかしいと思ったよ。一応、実家には寄つたんだろう？ 何も話を聞かなかつたのか？」

「寄つたは寄つたけどな、あつという間にケンカになつて、話らしい話なんかしなかつたよ」

「そつくりだな、お前ら親子

「ほつとけ」

「で、どうなんだ？」

「なにが」

「ナオと一緒になるつもつがあるのかつて話だよ」

「わかつて訊いてるだろ？、お前……」

低く唸りつつ半眼でブギを睨むと、ガシガシと乱暴に頭を搔く。

「あいつはオレに」とつちや妹分なんだ。そうとしかみれないし、結婚なんざ論外だよ」

「そうだろうなあ。一応本人の口から聞いておいつと思つてな。悪

く思ひな。しかしまあ、ナオはガツカリするだらうなあ

「……ナオは乗り気なのか？」

「昔からお前の後ろばかりついて歩いてたからな。そういう気持ちもあつたんじやないか」

深々と溜息を吐いて天を仰ぎ、動かなくなるザン。

「お前にや昔から麗しの姫君がいるんだものな。命を捨てても悔いのないって相手がさ。惚てるんだろ？」

「……そんなんじやねえよ」

「違うのか？」

間に返されて、しばし顎の傷へ無意識に手を伸ばしながら黙り込む。

「…………わかんねえ。わかんねえけど、な。オレ、おじさんみたいに、何かを守れる力が欲しかったんだ。自分が無力で、泣くしかないのは、嫌だつたんだ」

「そりが」

ボソボソと途切れ途切れの告白。ブギは頷いて、酒瓶を差し出す。

「ま、飲め」

「ん

しばらぐお互い黙つて食を進めていたが、頃合いをみてブギが口を開いた。

「サラサには会つてきたのか」

一瞬だけザンの手が止まるが、すぐに食事と酒の消費に戻つつ答える。

「ああ」

「なにか言つてたか？」

「自分に関わるなつてわ」

「ん～～、もともと人付き合いが多いわけじゃなかつたが、おつかさんが亡くなつてからは、ほぼ皆無に近いしな。ナオくらいしか村との接点が無いんじやないか？ 人間嫌いもひどくなつてゐみたいだし。わからんでもないけどな」

「婆様も同じことを言つてたよ」

「サラサのおつかさんが無くなつた時、お前のところにも連絡はいつたよな？ もしかしたら帰つて来るかと思つたんだがなあ」

片足を組んで頬杖をついたブギが、ほんの微かな非難が混じつた口調で言つた。

「まあ、お前が帰つてきたところで、なんかの役に立つたわけじゃなかつたかもしけんがね」

「……なんだか言葉に刺があるな」

「氣のせいだる。ま、これからが大変なのは間違いないことだな」

「やうだな……」

また溜息を吐くザンに、ブギは黙つて酒瓶を差し出す。

「氣長にやるしかなじだらうわ」

その後は、お互に湿っぽい話題は避けて、土産話や思い出話にしばし華が咲く。

やがて、夜もふけていい加減に一人とも酔いが回った頃、ザンが席を立つた。

「長居しきまつたな、そろそろお暇するよ」

大分酒が入ったはずだが、意外としつかりした足取りのザンに比べ、明らかにベロベロ寸前といった風情のブギが、立ち上がりかけたザンの手を掴んで引き留めた。

「お暇するつてオメー、家には戻れねえだらうし、こんな小さな村に宿なんかねえし、泊まる当てなんてねえだらうよ」

「今日は風もないし、雨も降らないからな。町外れで野宿でもするわ。明日からは……婆様にテントを借りようかと思ってるが」

「遠慮すんな。泊まつてけ」

「いや、そりやさすがに悪いだろ」

結婚したばかりと言つていい家に飛び込みで泊まるのはさすがに不躾だと思い、ザンは遠慮するが、それを察したブギが眉をしかめる。

「余計な気を使うなよ。そやは見えないかもしけんが、オレはお前とこいつしてまた顔を合わせられたのが、嬉しいんだよ。多分お前が思つてゐる以上にな。それを追い出して野宿させたなんてなつたら、寝覚めが悪くて敵わん」

やう言ひて、掴んだ腕を引つぱりザンを座らせる。

抵抗しようと思えばできたが、なんだかそれをするのは悪い気がして、ザンは大人しく座り直した。

「おーーー、ちょっとといいかーー？」

酔いで口調た声をかけると、すぐに母屋からヨナがやつてくる。

「「」こつ、今日は泊まつていくから、準備頼む」

「もう準備してあるわ。眠くなつたら、いつでも遊びに来れ」

「手間を掛けさせて、申し訳ない」

笑顔で言つヨナに、ザンが頭を下げる。

ヨナは笑みを深めて、空いた皿と酒瓶を持参した盆に乗せた。

「いいえ、この人がこんなに楽しそうなのは、久し振りに見るから。よければ、またいつでも遊びにきてね」

「おおい、ザン。ちょっとこい」

ヨナの言葉に恐縮したザンが、せりこ頭を下げるといふと、作業場の隅に移動していたブギが手招いた。

「なんだ?」

「ほいこれ。忘れないうちに渡しつくよ」

ブギが差しだして来たのは、布に包まれた細長い包みだ。重さからすると鉄製のなにかだろう。包みの形からすると、おそらく鍔の先かなにかだらう。

「ナオに頼まれたもんだが、サラサが使うんだらう。お前から渡してやつてくれ」

「ナオに渡せばいいのか?」

「……お前はアホか」

「へ?」

「サラサに直接渡すんだよ。少しでも接觸できる機会を逃してビリする」

半眼で言い含めるブギに、ザンの視線が泳いだ。

「お前な……悠長にしてて、取り返しのつかないことになつても知らんぞ」

思いの外重い響きの言葉に、ザンは驚いて視線を戻す。

「お前はもう、大きな失敗を一つ……いや、二つか？ してるんだ。もつと必死になれよ」

怒ったようにそう言って、ザンの手に包みを押しつける。

「失敗？」

まつたく不意打ちの言葉にザンは目を瞬かせたが、ブギにはそれを説明するつもりは無いようだった。いまいちおぼつかない手元で、酒瓶や食器をまとめ始める。

「さすがに飲み過ぎたな、今日はこれでお開きにしよう」

やううと思つてた仕事を忘れてたな、と笑いながら席を立つブギの手から食器を受け取り、ザンも母屋に向かった。

母屋に入る寸前に何気なく見上げた夜空は、満天の星空だった。

ふと、厳しい修行の間に、普段は無骨な師匠が教えてくれた、古い古い歌を思い出した。

それは、もの悲しく、優しい歌だった。

* * * * *

まだ幼いといえる少年は、丘の上に立っていた。

早朝、まだ明け切らない空は、薄く夜の色を残している。

海から吹いてくる潮の香を乗せた風が、まだ真新しい少年の顎に刻まれた傷を撫で、吹き抜けていった。

その眼下には小さな村があった。

生まれてから、ずっと過ぎじてきた場所。

そこだけが世界の全てだと、無意識に思い込んでいた場所。

大切な物がある場所。

いまから、すべてを置いていく場所。

生まれて初めて、泣きながら懇願した。

地面に額を擦りつけ、願いを口にした。

深夜に訊ねてきた少年に驚きもせず自宅に招き入れた老婆は、みたこともない厳しい表情で、根気強く少年の言葉を聞いていた。

やがて話を聞き終えた老婆は、部屋の隅にあつた琥珀色の珠のと

「今まで歩み寄った。

かざされた老婆の手に反応して柔らかく発光し始めた。

『たつた今、あんたが口にした覚悟に、嘘は無いね?』

振り向いた老婆の厳しい表情。大きくなはないが、鞭に似た鋭い声。だが、少年は法むことなく、涙を拭つてはつきりと頷いた。

『そりかい。じゃあ、いますぐ家に帰つて支度してきな』

頼みを聞いてくれそなのはともかく、あまりに急な話に少年は一瞬戸惑つた。

『なんだいその顔は。聞こえなかつたかい? いますぐ用意して、夜が明けないうちに村を出るんだよ。それともなにかい、両親に挨拶してからとでも思つてたかい。言つておくけど、自分の子供が守人になりたいなんて言い出したのを、はいそうですかと送り出す親なんかいやしないよ。守人の仕事も、その修行ですら死と隣り合わせなんだよ? 止められるに決まつてるだろ』

覚悟をしてこると言つても、まだ子供だ。言葉の中に混じった「死」という響きに、少年は身を固めて唾を飲み込んだ。

老婆は半眼で少年を見据え、ふんと鼻を鳴らした。

『覚悟だなんだと言つておいて、そんなことも考えもしなかつたかい? 半端な気持ちなら、止めちまつた方がいい。その程度の気持ちで修行に入れば、遠からず死ぬことになる。いまここで止めちま

えば、少なくとも死ぬことはないよ』

淡々としているが、それゆえに冷酷さを漂わせる老婆の言葉に、少年は激しく首を横に振つて立ち上がつた。

その目には、不安と怯えが色濃くあつた。

だが、それらを押さえつけ、乗り越えようとする強い意志も、そこに確かに存在を見せた。老婆はそれ以上無駄な言葉を重ねなかつた。

『いいかい、準備が終わつたらそのまま村を出て、街道沿いに東へ向かいな。道なりに行けば宿場町につくからね。今から出発すれば、子供の足でもギリギリ明日の夜までにはつけるはずさ。着いたら、ことと同じ天幕を探しな。そこの中人には、あたしから伝言を出しておく。その後はそこで聞きな』

少年は大きく頷いて老婆に礼を言つと、老婆の言葉である天幕から走り出た。

そして、少年は今丘の上に立つていた。

視線をゆっくり動かすと、村外れのさらに向こう。村人が近づかない岬の方に、半ば木々に隠れた粗末な小屋が見えた。

不意に視界がぼやける。

ぐい、と顎を持ち上げて空を見上げる。

細い顎を震わせて、耐える。

少年はしばらくそうしていたが、やがて背を向けて歩き出す。

そして、振り向くことは無かつた。

守人の剣が深々と打ち込まれた魔物の死体が、浜辺に打ち上げられた翌日のことだった。

* * * * *

二章 人魚の岬

1

* * * * *

『魔物の子め！』

『引きずり出せ！』

『火をかけるつ！』

『あたしの旦那を返しておくれ！』

『オレの娘もだ！』

言葉に乗せられた、あまりに剥き出しの悪意。

自らの正義を信じて疑わない。目が開きながらなにも見ていない者たちが発する暴力的な雰囲気。濃厚なそれは狂氣と言い切つてしまっても良かつた。

行動に酔いしれ、罪悪感を置き去りにし、誰一人として自分たちの姿を顧みない。

妄信という名の熱病に冒された愚者の群。愚かであるが故に立ち止まることなく躊躇し、踏みにじり、すり潰すのみに邁進する。

月明かりもなく、星明かりもない闇夜だった。

手明かりがなければ一寸先も見えない暗さの中、何本もの松明を掲げた幾つもの人影が、粗末に過ぎる小屋の周りを取り囲んでいる。松明の炎が悪魔のように揺らめき、それに合わせて影達が奇怪な踊りを踊っている。

その不吉な影と周囲を取り囲む惡意から、背後の小屋を守り、男は立っていた。

やや大柄なその身体には力みはなく、不必要的な氣負いもない。

男はただ大きな岩塊がそこににあるように、泰然と立っていた。

腰には、細かい象眼が施された長剣を下げていたが、殺氣立つ影達に囲まれながら、それに手を掛ける気配はない。

やがて、影達の真ん中が割れて、多少の威厳をまとわせた壮年の男が進み出だした。

中年の男は、精一杯の威厳を保とうとしていたが、どう足搔こうと、逆にあがけばあがくほど長剣の男との格の差は一目瞭然だ。そ

の右手中指には村長の証である指輪が填められている。

『わしは、皆を止めよつとしたんだ』

もの言いたげに見つめる男の視線を避けながら、村長が発したのは、言い訳じみた一言。

だが、それでも勢いがついたのかさらに続ける。

『わかるだらう？　皆、もう限界なのだ。飢饉に、嵐。それに疫病……。そして今度は魔物だ。もうわしには皆を止めることはできん』

『』

それを最後まで黙つて聞いていた長剣の男は怪訝そうに首を傾げると、響きのよい低音でゆっくりと口を開いた。

『……じばりく続いた災害で、皆の心が荒んでいるのは理解できます。今回の魔物の件は、守人でありながら、被害を出した上にいまだ退治できていない私に責があることも理解できます。ですが……』

言葉を切り、固唾を飲んで一人のやつとりに注目している村人達を見回す。

長剣の男には見知った顔ばかりだった。

「このところ近隣の村々を脅かしている魔物により、家族を奪われた者達がいた。

彼らの哀しみは、魔物から彼らの生活を守るのが使命である、自分が不甲斐なさが招いたものだ。彼らの憤りを受け止める義務が自

分にはある。

だが彼らも、魔物に家族を奪われたわけでない、疫病や嵐で家族を失つた村人達も、憎悪に満ち視線を注ぐ相手は長剣の男ではない。

その後ろ。小屋に向かつてだ。

『村長、これははどうこうことじょう? 魔物を狩ることもできていない、自らの仕事も満足にできていない私に対する抗議。そういう受け取ればよいのでしょうか?』

長剣の男の言葉に、村長が苦虫を噉み潰す。

『言わすとも解っているだらう。遠回しこそ叶はるのはやめて貰いたいものだ』

『とほけてなびこません。貴方こそ回つべどに言い方をせず、はつきりと仰つたら如何か?』

鋭く詰問する口調に、村長が眉を吊り上げる。

『だつたらはつきり言おひ、あの「魔物の子」を出せ! あの子供のせいで災厄が村に降りかかるのだらうからな!』

『殺すのですか?』

村長が僅かに残つた良心からか、使わずにいた言葉を男はあつたり口にする。

数に任せて責め立てるような卑劣な真似をしておいて、今更なり

を躊躇する』ことがあるのか、村長が言葉に詰まる。

『私の娘を、殺すと、そう言われるのか?』

威圧感があるとは言えない態度だといつのに、男が言いながら一步を踏み出すと、それに押されるように村長が一步下がる。

『ど、どう考へてもおかしいだろう?…あの子供が生まれてからといつもの、悪いことが重なりすぎる…あの子供が原因に決まつている…』

下がってしまったことに羞恥心を刺激されたか、顔を赤黒く染めながら怒鳴る村長。

その内容と言えば、言い訳にしてもお粗末極まりなく、責任転嫁と八つ当たりでしかない。なぜ娘が原因と言い切れるのですか?婆様もそれははつきり否定されていたはず。嵐による被害も、食糧難も、流行病も、初めて起こつたものではないでしょう。それが偶然に重なつたのは娘のせいだと仰るのか??

怒りはない。男の言葉にはただ事実を確認しようとする厳然さがあつたが、集団心理に正常さを奪われ、はけ口を求める村人達が、今更引き下がるわけもない。

むしろ、正論に対して反論ができるないぶん、不満は高まる。

『娘と同じ時期に生まれた子供は他もいるでしょう。……綱元、貴方の娘さんは、私の娘と一月も変わらない生まれでしたね?』

いきなり話を振られた、人垣の前面にいた髭面の男が言葉に詰ま

る。

『それなのに、私の娘が少し他人と違う見た目をしているだけで、すべての責任は娘にあると、そう言われるのですね?』

ぐるりと周囲を見回す男の視線を、正面から受け止められる人間は、少なくともここには誰一人いなかつた。

もしここで男の視線を受け止められたなら、そこに浮かんでいたのは怒りでも侮蔑でもなく、哀しみに満ちた憐れみの色であつたことに気が付いただろう。

『だが、現に多くの死人が出たのだ! 流行病もなんとか鳴りを潜め、食糧難も目処が立つたが、まだ魔物はうろつき、死人が出続けているのだ!』

理屈も何もなく、やりどころのない不満と憤りをぶつける。

そこには彼らの信じる正義など、影も形も存在しない。

結局彼らにとつては大義名分など必要なく、ただ自分たちの不満をぶつける先が欲しいだけなのだ。

すべてを見透かしているような男は、ひつそり溜息をついた。

それは周りの誰にも気付かれないようなものだったが、真正面にいた村長だけはそれに気付いてしまった。

『貴様!』

その溜息を侮蔑ととつたのだろう、血が上つてドス黒く染まつた顔で男に掴みかかり、呪いを掛けるよつに言つた。

『貴様などに、妹をやるのでは無かつた……』

どんな言葉にも搖るがなかつた男の表情が、そこで初めて揺らいだ。

『やめてよー』

甲高い子供の叫びが、弾けそうにまで高まつていた場の緊張感に冷水を浴びせかけた。

その声に驚いた二人が目を向けると、人垣をくぐり抜けて小さな人影が転がり出できた。

小ちな人影は捕まえようとする手をくぐり抜けて、まつすぐ村長の腰の辺りに突つ込む。

必死な様子で村長の腰にしがみついたのは、十歳になるかならいかの少年だつた。

全力でぶつかつても、大人を搖るがせもできない少年は、無我夢中で叫んだ。

『やめてよ、おとうさん！ あのこがなにをしたつていうんだ！ おじさんやおばさんがなにしたつていうんだよー』

少年 息子の登場は予想外だつたのだろう、面食らつていた村長だつたが、すぐに怒りの表情に変わると、遠慮会釈無く怒鳴りつ

けた。

『なんでお前がここにいるのだ！ 家にいと言つたはずだ！ 離さんか！ 子供が首を突つ込む話ではない！』

怒鳴りつけられようが振り回されようが、村長の服をがっしり掴んで離そとしない少年に業を煮やし、醜態を衆人環視にさらしている羞恥心に顔を染めた村長は、衝動的に力任せの拳を振るつた。

鈍い音が響いて少年が地面に転がり、そのままぐったりと動かなくなつた。

場が凍り付いたように静まりかかる。

村長は頭を冷やされたのか、自分の手と息子を交互に見て、どうしたらいいのかわからずに立ちすくんだ。

凍り付いた時間の中、男だけが素早く少年に駆け寄つて抱き起こした。

『あ……』

一瞬だけ氣を失っていた少年は、男に抱き起されると薄く目を開けた。

その口の端からは血が筋を引き、指輪に引っかけられたのだろう、頸の左側が大きめに裂けて、血が溢れていた。

男は懐から清潔な布を取り出して少年の顔を拭いてやると、その布を握らせる。

『これで傷口を押さえておきなさい』

まだどこか支店の焦点が合わない感じで布を受け取り、言われるままに顎の傷を押さえる。

やがて、意識がはつきつしてくつれ、その瞳に涙が滲んでくる。

『おじさん……。ぼく……ぼくは……』

殴られたからではなく、傷の痛みからでもない。

ただ、匂の無力さに対する悔しさから溢れた涙だった。

男は、優しく柔らかい笑顔で、そっと少年の頭に手を置いた。

『お前は、優しくて勇敢だな。……お前はいい男だ』

大きな手のひらから伝わる温もりに緊張が解けたのか、少年は静かにしゃべり上げ始めた。

男は手を貸して少年を立たせると、ゆっくり辺りを見回し、村長の方を向いた。

すでにその顔には少年に見せた表情はなく、代わりにあったのは痛みすら感じられそうな決意の色。

『村長』

『な、なんだ?』

茫然自失の体だった村長が、急に声をかけられてビクリと肩を震わせた。

明らかに先程までは雰囲気が変わった男に、田に見えて気圧されている。

『魔物を退治すれば、納得していただけますか?』

田の前の村長だけでなく、周りを取り囲んだ者達全員に対する問い合わせた。

村長は少し落ち着かないで周辺を見回す。一連のやりとりで、すでに気勢を削がれていたらしく、積極的な反対意見はなさそうだった。

『……うむ。今、わしらの生活を脅かしているのは、とりあえず魔物だけだ。それさえなんとかなればな。だが、退治すると言つても、できるのか? 現に、今の今まで……』

『それが守人の使命ならば』

強い口調で、村長の言葉を遮る。

『なんとしても』

幼い少女は、小屋の中でも母にしつかりと抱かれたまま、泣き続け

ていた。

押し寄せる圧倒的な悪意に、抗う術を持たない少女が、他に何ができるだろう。

小屋を取り巻く大勢の気配が、陰鬱な足音と共に去った後も幼女は泣き続けた。

そうしていれば、にじり寄つてくる不安が消え去るかのように。

その後に待つ、父の運命を知っているかのように。

* * * * *

ふと、サラサは目を覚ました。

真夜中。

明かり取りの小さな窓から月の光が差し込む小屋の中は暗く、壁の所々にある隙間からも刃物のような月光が差し込み、真ん中の簡易な炉の灰の中にほんのりと赤い熾火が見えた。

目が腫れぼつたい。

手を伸ばすと濡れていた。

ゆっくり身体を起こすと粗末な掛け布が滑り落ち、その上に瞳を濡らしていたものの残りがこぼれ落ちる。

ほんの少しの間だけそのまままでいた後、握りしめた拳で田元を乱暴にこすり、弱々しく溜息をつく。

もうあの口から随分経つが、今でもよく夢に見る。

これでも昔に比べれば随分ましになつたのだ。

母が生きていた頃には、夜中に跳ね起きて、母が懸命になだめてくれるのに構わず、延々と泣き続けたことも多かった。

悲しさや辛さ、恐怖が薄れたわけでも癒されたわけでもない。まして、無感覚になつたのでもない。

ただ我慢できるのみになつただけ。

誰もいない部屋を見回す。

もつ一度、ひつそりと溜息をつく。

わざやかだつたが、暖かい時間。

わざやかだつたからこそ、なによりも大切だつた空間。

心の底に沈殿した思い出は、溜息で吹き上げられ、またゆっくりと沈んでいく。

思に出すには辛く、忘れてしまつては哀しい記憶。

胸の奥からこみ上げる感情は無理矢理飲み込んで、荒々しく掛け布を頭から被つて横になる。

それからしばらく、遠い潮騒を聞きながら寝返りも打たずにつしていたサラサは、やがてのろのろと起き上がる。

眠気はもうどこにこつてしまつたようだ。

もともと簡単に身支度を調べ、鉢を手に小屋を出る。

夜空の中天には満月が掛かり、その明るさで星がよく見えなかつた。

村からかなり離れ、浜からもやや離れた小高い丘に、サラサが暮らす小屋はあった。

昼間であれば、林の隙間から村が少し見えるのだが、こんな真夜中に起きている者はいないようで、村のある方角は夜闇に紛れてよく見えない。

白々とした月は透明な光を地上に投げかけ、控えめな星は夜空の主役を引き立てる立場に甘んじていた。

サラサは顔を晒したまま、ボロ布を胸の前でかき合わせ、村とは反対方向に歩き出した。

しばらく歩き続けると、まばらにいたが増え始め、やがて景色は砂浜から岩場に変わっていく。岩と岩へ飛び移りながらさらに進む。

サラサが向かう先は岬になつてゐるが、その岬は近隣では最も風光明媚な場所として知られ、入り組んだ岩場は豊富な海産物を育んでいる。

それにも関わらず、昔から近づく人間はほとんどいない。

「人魚の岬」と人々が呼ぶその岬は、古くから人魚が出没し人を惑わすとされていたからだ。

言い伝えの真偽はともかく、昼間でも人が近づかない場所である為、サラサは好んで足繁く通っていた。

今日のように寝付かれない夜などは、ほぼ必ずやつてきていた。

海に向かつて伸びた岬の突端まで来たサラサは、鯨の背のようこの海面から姿を見せて、いる岩場に飛び移り、鉢を下に置いた。

それから周辺を見回して何もないことを確認すると、サンダルを脱ぎ、着ているものをすべて脱ぎ始めた。

するりと服を脱ぎ落としたその下から現れたのは、人の形をした月光のような姿だった。

長く緩やかに波打つた豊かな髪も。

精緻な彫刻のように整つた容貌も。

細く華奢に見えるが、しつかりと引き締まつた手足も。

なめらかに曲線を描く、上質な陶器の肌地をした身体も。

すべてが月光を浴びて、蒼みがかつたほのかな白銀に輝いていた
だった。

その身体の中で、月明かりを呼吸する薄赤い可憐な唇と、血の深
紅を湛えた瞳だけが、花の咲くようにしてあつた。

魔物に呪われた、と人々が噂するサラサの姿。

赤以外のすべての色を無くしたようなその姿を、サラサは生まれ
ながらに授けられた。

世界の淀みから生まれてくると言われる魔物。それを退治する役
目を背負つた守人を父に持つたサラサのその姿は、魔物の呪いと噂
された。

普通の姿をしていれば飛び抜けて美しい容貌も、その魔性を引き
立てるものでしかなく、村人達には恐怖の対象でしかない。

だが、今この時。

月光の下に惜しげもなく晒されたその姿は、至高の芸術品の如く
美しかった。

それでも、サラサ自身は自分の身体を見下ろしてひどく悲しい顔
をすると、震えるように自らの肩を抱いた。

それがどんな美しさをもつていたとしても、サラサは自分の姿が
堪らなく嫌いだった。

自分のこの姿にも関わらず、優しさと愛情を注いでくれた両親を不幸にしたのは、他ならない」の姿だった。

他人が見たら、おそらく奇異に思うだらうこの月光浴は、太陽の光を長く浴びることができない、世界から拒絶されたような存在であると自覚するサラサが、自分は確かにこの世界に存在するのだという確認の儀式だった。

例えそれが気休めでも、意味のないことだったとしても、サラサにとつては、大事な、大事な時間だった。

その時間を邪魔する者は今、誰もいない。

清らかな輝きを投げかける円と、わざめく星々がそれを見つめ、潮騒だけが熱心にその美しさを讃め讃えていた。

どれだけの時間が経つた時だろうか。

「……あなたは、誰ですか？」

その小さく可憐な声は、潮騒に紛れることなくサラサの耳に届いた。

突然の声に、サラサは弾かれたように、素早く脱いだ服と話を手に伸ばし、身体を隠しつつ油断無く話を構え、声の主を捜した。

「えつ……？　あ、あのっ、驚かしてしまったのなら、ごめんなさい……」

カラサの反応は予想外だつたのか、惑いが色濃い声は、妙に礼儀正しい少女のものだつた。

声がしてきた方にカラサが田を向けると、田の縁に手を掛け、海中から顔だけ出しておどむどといぢりを覗き込む少女と田があつた。見たところ、カラサより一歳か二歳ほど年下だらうか。この辺りでは珍しい金髪で、そのやや垂れ気味の田はマリソンローズの紫がかった青だった。

警戒心剥き出しの視線を向けるカラサの態度に少々の怯えを見せながらも、少女はさりと訊ねてきた。

「あの、こけないとは思いましたが、先程からずっと見てました。話しかけるつもりはなかつたのですけれど、あの、……あまりに綺麗なお姿でしたので、っこ……」

一向に警戒心を崩さず鋭い田で見つめてくるカラサに、その語尾がしほんديいく。

「あのう……怒ります?」

精一杯身を縮めて上田遣いに訊ねる少女から田を離わざ、いつも被つているボロ布だけを身体に巻き付けて、カラサは厳しい声で逆に訊いた。

「あなた、この辺の子じゃないね?」

「え? あの、まあ、この辺と言われば、この辺に住んでるんですけど……」

妙に歯切れの悪い返答に、サラサの警戒がさらに濃くなる。

大体、真夜中だというのに、人が普段近づかないような場所で、こんなに気弱そうな少女がうつりついていること自体おかしくはないか。

見たところ、人目を避けなければいけないような要素は見あたらない。確かに地元の人間にしては肌が白いものの、サラサとは違つて「ごく自然な白さだ。サラサほど日光に気をつけなければいけない理由があるとも思えなかつた。

「とにかく、あがつてきなさい。いつまでもそつしているわけにもいかないでしょ?」

比較的今日は波が穏やかだが、それでも岩場には小さな波が打ち寄せている。半分海に浸かつたままでは、あまり落ち着いて話しもできないだろう。

だが、少女は急にそわそわし始め、きょろきょろと視線を彷徨わせ出した。

「えつと、その、上がらないとダメ、ですか?」

「……人間の振りして、海に引きずり込むとする魔物もいるやうだけど?」

半眼のサラサが鈎の柄を絞り上げると、少女は慌てて両手を振つた。

「あ、あの、わたし、魔物じゃないです！」

「自分で、魔物です、って言つ魔物もいよいよつな氣がするナビ」

「あう……それはそうですねナビ」

少女はなおも躊躇して押し黙つたが、やがて覚悟を決めた様子で口を開いた。

「あの、何を見ても驚かないと、約束してもらひますか？」

「わたしも見ての通りだから、大抵のことには驚かないと思つナビ」

「それじゃあ……」

少女は背の上に両手をかけ、海に浸かっていた下半身を一気に引き抜くようにして、背の上にお尻を乗せた。

その腰から下が、月の光を反射して虹色に輝いた。

「え……？」

ほつそりとした腰のすぐ下から、見える範囲全体が小さく薄い鱗に覆われていた。その美しい色が、少女の身動きとともに微妙な変化を見せる。

少女は一本の足を持つてなかった。

足の代わりに伸びていたのは、魚とイルカを掛け合わせたような造形の下半身。

サラサからは海中残つていて見えないが、その下半身の先にはおそらく大きなヒレがあるのでさう。

「人魚？！」

自分の見たものを信じられずに、サラサは丸く見開いた目を何度も瞬いた。

見た瞬間に人魚だと解ったのは、サラサ自身に目撃経験があつたからではなく、おとぎ話で聞いていたからだ。

絵すらみたこともなかつたが、上半身が人間で下半身が魚など人魚以外にあり得ない。

村人は実在を信じてる者が多いようだが、人魚の岬近くによく潜るサラサにとって、人魚など迷信の産物で、実際にいるなどと考えもしなかつた。

しかし、目の前にいるのは、紛れもなく人魚だった。

サラサは少しパニックになりかけて、顔を押さえて深呼吸を繰り返す。

「やつぱり驚きましたか？」

その反応に否定的なものを感じなかつたのか、人魚の少女は悪戯っぽく、クスリと笑つた。

「初めてまして。虹色鱗の部族、鼻先の一一番手リュークの娘、フラン

と言いました

姿を見せて開き直ったのか、フラムに先程までのオドオドとしたところが無くなっていた。

身体の構造上、岩の端に腰掛けたままでは正面が向けないので、できるだけ上体をサラサに向けて、丁寧な彼女の部族における正式な名乗りをする。

「よりしければ、あなたのお名前を聞かせていただけますか?」

好奇心に満ちた無邪気な笑顔で小首を傾げる。

言葉遣いは大人のようだが、その見た目や仕草、くるくるとめまぐるしく変化する表情は、逆に幼さを感じさせた。

その態度を見た途端、サラサの中にあつた警戒心は煙のように消え、代わりにこの人魚の少女に対する好奇心が湧いてきた。

「わたしはサラサよ」

答えながら銛を左手に持ち替え、フラムの側まで歩いて行くと、その隣に腰を下ろした。

いくら人魚とは言え、明らかに不自然な体勢でいるフラムを考慮して、少しでも相手に楽な姿勢で話を聞くこうと思つたのだ。

座る時にフラムの足下を見下ろすと、燐光を発するよつよきらめくフラムの尾びれの先が、意外な長さで水中を揺らめいていた。

ふと横顔に視線を感じてフランの方を向くと、彼女はすぐ隣にやつてきたサラサの顔を、穴が空きそうなほど凝視していた。

その視線に悪意の類は感じられず、あまりにまっすぐ純真なものだつたので、あまりそういう視線に慣れていないサラサは戸惑つた。

「あの、名乗つたばかりで、不躾な質問をしていいですか？」

前のめりに訊ねてくるフランの表情は真剣そのもの。

サラサは多少気圧されながらも頷く。

「あのですね……」

「ぐり、ヒフランの喉が動く。

「サラサさんは人間ですか？ それとも、ひょっとして、月の精霊だつたりとか！？」

「…………は？」

突拍子もない言葉に、サラサはポカンと口を開けて絶句した。

一瞬、自分には理解できない冗談の類なのかと思ったが、フランの真剣な様子を見る限り迂遠な冗談の類ではないらしい。

どうも本氣で訊いているらしい」とが理解できたサラサは、苦笑いを浮かべながら答えた。

「……違うよ。わたしは人間。月の精なんかじゃない。そう……」

どこか複雑に、色々な感情が見え隠れする田をフランに向ける。

透明な微笑み。

「わたしは、ただの、人間だよ……」

2

「よう」

田の前に広がる砂浜と海を望む木陰に座り込み、ボロ布を被つたまま、うつらうつらと舟を漕いでいたサラサは、ふいに掛けられた声で目を覚ました。

わざわざ確認しなくても、誰なのかはすぐに判った。

「……なんの用？」

寝起きという理由だけではなく、聞いた者がどれだけ鈍かうとう即座に気付くだろう不機嫌な声で、相手の顔も見ずに言い捨てる。

「確かに、わたしは関わるなって言つたような気がするけど」

「……をどうとっても友好的とはいひ難い態度に怯みながらも、ザ

ンはサラサの皿の前に細長に包みを差し出す。

「あーー……これ、頼まれたんで、届けに来たんだ」

サラサはボロ布の奥から包みを確認し、黙つて受け取るとすぐこの包みをとこで中を確認する。

「ナオに頼んでたやつ……なんドアンタが持つてくるの?」

「昨日ブギのところに厄介になつてな。その時にブギから頼まれた」

「…………ふう。一応、礼は言つておくわ」

丁寧に銛先を包み直して膝の上に乗せたサラサは、そのまま海を眺めて動かなくなる。

だが、ザンは所在なさげにはしているが、その場に突つ立つたままだ。

「まだなにがあるの?」

立ち去る気配のないザンに、やはつ視線を向けずに叫ぶ。

しばし逡巡してからザンは口を開く。

「…………座らせてもらつていいか?」

「…………好きにすれば」

少し長めに沈黙してから帰ってきた返事は素つ氣のないものだつ

たが、とうあえずは拒絕では無かつたことに安堵したザンは、サラサと微妙な距離を置いて、海の方を向いて座る。

その一連の動作の間、サラサの視線が腰の長剣に注がれてくることにザンは気付いたが、サラサの方を見るとすぐに視線を逸らされたので、慎重にそこは触れないようにした。

しばらく並んで海を眺めていたが、やがてザンが思い出したように言った。

「叔母さん……亡くなつたんだつてな」

サラサは無言。

「叔父さん達の、墓は建てたのか?」

「……そんなこと聞こへどうすんだの?」

やはり固い声にザンは迷つたものの、素直に答えた。

「叔父さんと叔母さんは話になつたから、墓参りをせんもいらつたいなと思つて……」

「無いわ」

ザンが喋っているのをスッパリ断ち切るなり、サラサはまっさりと答えた。

「アンタは、お父さんが行方不明になつてすぐじつか消えちゃつたから知らないだろつけど。結局あの後見つかったのはお父さんの剣

だけで、お父さん自身はもちろん、形見になりそうなものも何一つ見つからなかつた。強いて言えば

ボロ布の下で、サラサの視線がザンの長剣に向くのが判つた。

「それが形見つてことになるのかかもしれないけど、守人の証だからとかいう理由で取り上げられたから。本当に死んだかどうかも判らないお父さんのお墓を、わたしもお母さんも建てる氣にならなかつた」

淡々と言ひながら、視線を海に戻す。

「どう考えたって生きてるはずなかつたけど。……だから、お母さんが死んだ時は、少しでもお父さんの側に行けるように、わたしが自分の手で海に流した」

ただ事実を口にしてくるだけの口調。ザンは黙つて聞いていた。

「お墓つていうんなら、この海が、お父さんとお母さんのお墓つて言えるのかもね」

ザンには、サラサにかける言葉を思いつけなかつた。

重い沈黙。一人の間を潮騒だけが流れる。

しばらくして、先に沈黙を破つたのは、以外にもサラサからだつた。

「やついえば、アンタ結婚するんだつて？」

いきなり予想外の方向から浴びせられた話題に、ザンは言葉を失つた。

サラサは不自然なくらいに落ち着いた声色でさりげなく言つた。

「ナオから聞いた。喜んでたよ、あの娘」

「い、いや、それはその……」

しじるもじるに、なにか言い訳めいたことを口にしようとしたザンを無視して、サラサは村の方に顔を向けた。

「噂をすれば影つていうけど」

その言葉にサラサが見ている方向に顔を向けると、ナオが小走りに二つちへ向かってするのが見えた。

「じゃあね」

そちらにザンが氣をとられた瞬間に、戦いの訓練を受けたザンが驚く程の絶妙な間で立ち上がったサラサは、そのままあつという間に早足で立ち去つた。

ザンは狐に摘まれたような顔でそれを見送つてしまつたあと、我に帰つて自分の顔に張り手を一発入れ、溜息と共に大きく肩を落とした。

* * * * *

『かくれちゃダメだる、せりー。』

少年は自分の背後に回って前に出ようとしない小さな女の子の腕を掴み、半ば強引に引きずり出して前に立たせる。

しかし、女の子はまたすぐに小動物の素早いで少年の後ろに戻ってしまう。

『おい、怒るぞー。』

苛ついた少年の大声に、少年の脇からはみ出した小さな肩が小さく震える。

『べつにこいよ？ こわがつてるじゃない』

少年の手の前に立つ、ボロを被つた小さな人物が、遠慮がちに言う。

声からすると女の子のようで、少年の後ろに隠れる女の子と体格からするとほとんど年齢に差はないだろう。

『怖がつてゐわけじゃないって。だって、こいつが来たいって言つたんだもん。はずかしがつてるだけだよ』

『……そつなの？』

『やうだよー。』

少年の力強い保証に勇気づけられたボロ布の女の子は、頭までつぱりと被った布を肩まで下ろした。

布の下から現れたのは、真珠よりも美しい純白の髪。整った容貌の中に据えられた深紅の瞳。

少年の後ろからそれを伺っていた女の子が慌てて顔を引っ込める。

ボロ布の女の子がゆっくり少年の背後に回ると、相手は少年の背中に顔を押しつけてしがみついていた。

その肩を優しく叩く。

相手の女の子は、びっくりして飛び上がり、慌てて振り返る。

そこで初めて二人の女の子はお互いを見つめ合った。

磨き込んだ黒曜石のような黒瞳とお揃いな、艶のある黒髪は短く整えられていて、美しいとは言えないが、日焼けした肌と共に生命力が満ちて愛嬌があり、充分に可愛らしい。

見た目に關していくば、あつらえたように好対照の二人。

黒髪の女の子の方は、不思議な美しさを持つ真珠のような女の子に魅入ったように無言。

『はじめまして。よろしく、ね?』

『あ……うん、よろしく……』

首を傾げて笑顔を浮かべると、黒髪の女の子は顔を赤く染めてうつむく。

相手に判るように、右手を差し出しつゝ言つた。

『わたしのおともだちに、なつてくれる?』

黒髪の女の子は驚きに目を瞬き、差し出されたその手を見て、先刻から黙つて一人のやりとりを黙つてみている少年を見て、最後に真珠色の女の子を見た。

少し長めの時間その視線は、差し出された手とその持ち主の顔との間を彷徨つていたが、やがて黒髪の女の子はその手を握つた。

『……ともだち?』

『うふ、ともだち』

よつやく黒髪の女の子が、本来の魅力的な笑顔を浮かべる。

一人が仲良くなるのに、さほどの時間はかからなかつた。

* * * * *

鎌打つ響きが作業場に満ちる。

「じんまりと、だが機能的に考えられて整えられた横座に腰を下ろして、ブギは鍋の修理をしていた。

溶けた銀色の鉄を、鍋の底に空いた小さな穴に擦りつけ、金床の丸い部分を使って叩き馴染ませて塞いでいく。

鍛冶屋というと道具を作るイメージが強いが、ブギのように野鍛冶に分類される小さな鍛冶屋は、作るよりも修理作業の割合が圧倒的だ。

新しく作ることも無くはないが、新しい鉄材で作ることは少なく、多くは古鉄を作り替えることが多かった。

道具の修理にせよ、作り替えにせよ、人が使ったという時間が染みついた道具が、火の中で新しく生まれ変わったり、元の能力を取り戻していく行程がブギは好きだった。

今日は特に調子が良いのか、昨日の深酒の影響もほとんどないようで、鼻歌交じりに作業を進めていく。

「ほい、一丁上がり」

粗熱を取る為に砂の上に鍋を置くと、作業場の外から声がかかつた。

「ブギ、こる〜？」

「ナオか、いらっしゃい」

横座の中で腰を伸ばしたがブギが答えると、勝手知ったるなんとやらで、ナオが作業場の中に入ってくる。

「頼んでた物を取りに来たんだけど」

「は？ ああ、鉢のことか。ナオ、今日はずんに会ってないのか？」

「わざわざ会つたけど」

「じゃあ言い忘れたかな？ あいつ昨日はうちに泊まつたんで、その時ついでだから届けてくれつて頼んだんだが」

「ズンに？」

「聞いてないか？」

ナオは首を横に振った。

「会つたことは会つたけど、なんか考え事してたみたいで生返事だつたし……。あ、そつか」 不意に納得して手を叩く。

「だからさつき浜の方にいたんだ

「浜？」

「うん、サラサがいつも海見てる辺り。あ、そつそつ、借りてた本

も返しに来たの。はい」

肩から提げた袋の中から革の装丁で、かなり専門的な「つい本を取り出し、礼を言いながら差し出した。

「もう読み終わったのか。どんどん早くなるな

「勉強するの、面白いもの。こつも仕事中に邪魔しちゃってゴメンね」

「いや、こんな田舎じや好き」のんで読書しようなんて変人はオレしかいないからな。他にも読んでくれる人間がいるなら、本も喜ぶさ。ちょっと待ってる、次の本持ってきてやるから」

本を受け取つて横座から出たブギは母屋に姿を消して、しばらくすると、やはり分厚い本を持って戻つてくる。

「さすが、詠人にならつて人間は勉強家だな。そついや、央都に留学するつて話があつたよな。どうなつたんだ?」

「その話? うん、しばらくは延期になるのかな」

ナオは小麦色の頬を少し赤く染める。

「ほら、これから、少し忙しくなるじゃない?」

ナオの態度に、ブギはほんの少し眉根を寄せた。

「なあナオ、ザンの奴、何も言つてなかつたか?」

妙に漠然とした質問だったが、ナオは首を横に振る。

「何つて、別に……？ セツキも言つたけど、なんかぼけっとして、ほとんどひの話なんて聞いてなかつたみたいだつたよ。なんで？」

「んーー、いや、心当たりがなければいいんだけどな」

「変なの。じやあ、用事も終わつたし、帰るね。本、ありがと」

「ああ」

手を振つて作業場を後にするナオに手を振り返し、その背中が見えなくなるのを確認してから、ブギは唸りつつ頭を搔いた。

「後二回せば回すほど面倒臭くなるだろ？」「なにやつてるんだあいつ」「いつ

「アツ簡単じやないんじよ。幼なじみなんだから、ザン君にも色々あるんじやない？」

「つむつむー。」

独り言のつもりで呟いたことに返事が帰つてきて、ブギは驚きに声を上げる。焦つて振り向くと田中が一人分の茶を用意して立つていた。

「ナオちゃん帰つちやつたのね。お茶の用意してきただけじ

夫の様子に、くすりと笑顔を浮かべ、近くにある手頃な台の盆

「」と茶を置いて自分も座る。

「一人のこと……いえ、三人ね、心配なのはわかるけど。男女の仲は、外から見るとバカバカしくらいに単純に見えることもあるわ。本人達には見えないことだけでしょうけど」

バツが悪そうに正面に座る夫を優しい目で眺めながら、ヨナは茶に口をつける。

「オレはさ……あいつの友達なんだよな。でも、ザンがサラサと知り合ってからも、昔の一件の時も、あいつになにもやってやれてないんだよなあ」

ぱつぽつとこぼすブギの言葉を、妻は黙つて聞く。

耳学問ではあるが、ブギはかなり早い時期に、サラサのような容貌の持ち主が稀に世の中に存在していて、央都最新の学説で魔物との関連性についてはつきりと否定されていることを知っている。

元々他の村人達と違つて、あまりサラサに対して先入観をもつていなかつたが、物心つく前からの付き合いであるザンとサラサの交流が始まつた頃から、すでにサラサに対する惡意など欠片もなかつた。

当時はザンと遊ぶ時間が少なくなつたことに寂しさを感じたが、それ以上に嬉しそうな友人の顔を見るのは嬉しかった。

サラサが今ほど態度が硬化する前に、本来の性格を見知っていた為、村人のサラサに対する扱いには忸怩たる思いもあるが、自分が騒いでも何も変わらないだろうし、下手に問題にすると、逆に

風当たりが強くなつてサラサからの仕事を受けるのに支障が出る可能性もある。

元々他村の出身のヨナには、ブギの影響で先入観を持たせないで済んだのだが。

「多分、余計なことをしないのが一番良かつたんだとは思うけどな。それでも、もつとなんかやつてやれたんじゃないかって、今でも思うんだよ……」

「なにもないと思つわよ」

スッパリとブギの愚痴を切り捨てるヨナ。

「色々と状況は面倒臭かったのかもしれないけど、あなたが心配しているのは、ザン君とサラサちゃんのことでしょう？ そこだけに限るなら、結局は男と女の話じゃない。少なくともこれからのことば、本人達がなんとかする話よ。周りは見守るしかないわ」

「……大したもんだよ、お前は」

盛大に苦笑いするブギ。

「まあそういうふうに惚れたんだけどな」

「褒めても今日はお酒、出ないわよ。昨日あれだけ飲んだんだから、もう言いながら、まじめでも無む邪じやくスクスクと笑うが、すぐに表情を曇らせる。

「でも……本当にできぬわよ。ザン君が帰ってきたから、多分一番最悪なことは避けられるでしょうけど。二人の間のことばっかりはね……。唯一できることって言つなら、ザン君が弱音を吐きたがつてゐる時には、一緒にお酒でも飲んであげることくらいかしら？ そういう時くらいなら、好きに飲んで構わないから」

ザンとは昨日初めて会つたし、サラサとはほとんど交流がなく、ナオとも顔見知り以上の仲ではない。だが、自分の夫が彼らのこと大切に考えているのはよく解つていた。

正直に言えば、あまり面倒なことに首を突つ込んで欲しくないが、ブギの気持ちを考えれば、自分にできるくらいのことなら協力したいと思つてゐるヨナだった。

「ありがとうな、ヨナ。さ、仕事するか」

ぐいっと残りの茶を干して、ブギは立ち上がつた。

満月からいくらか欠けた月が、それでも充分明るく地上を照らしていた。

「ごめんね、待たせた？」

普段の言動を知つてゐる人間が聞いたら耳を疑うような優しい声

で、サラサは岩棚に腰掛けたフラムに声をかけつつ、自分もその横に座つて波打ち際に足を入れた。

「いいえ。わたし、星を見るのが好きなので、待つのは苦になりません」

太陽の下で見れば、さぞかし輝いて見えるであろう笑顔でフラムは答える。

満月の夜の不思議な出会い以来、二人はこうして真夜中の待ち合わせを重ねていた。

最初の出会いの時に、サラサは人魚が種族として実際に存在し、しかも地上と海中の違いはあるが、人間と大差のない生活をしているということを知った。

フラムから聞いたところによると、人魚という種族は出生率がやや低いらしく、同年代がほとんどいないので、その為一人で遊んでいることが多いそうだ。

出会った夜も、一人で星を見に出てきたところで、偶然にサラサの姿を見つけたらしい。

両親には内緒で出てきている為、バレたらきつと怒られます、とフラムは笑っていた。

その後しばし話しあみ、どちらともなくまた会う約束をして別れたのだが、他に解つたことと言えば、フラムがいわゆる族長の一人娘で、今年十三歳になるということ。

それと人魚の部族が岬の沖合に広がる珊瑚礁の辺りだといつ」と
だった。

本来人付き合いを避けがちのサラサだったが、それは本来の性格
といつわけではなく、相手に迷惑を掛けたくないというのが根本に
ある。

それは特にナオに対して顕著だったが、ナオが自分を友達と呼ん
で、今でも親しげな態度で接してくれるのは心底嬉しいし、感謝も
している。ナオがいなければ、生活雑貨の類を手に入れることがさら
今より遙かに苦労するだろう。

だが、そうであればなおさら、自分と関わることでナオも白眼視
されるのではないかと、サラサは恐れているのだ。

その点だけでいえば、フランムに対してはそんな心配はなく、何も
臆することなく接することができる。フランムが人魚であることなど、
サラサにとっては極々些細なことだった。

「それに、こちらこそこんな夜更けに度々呼び出して申し訳ないで
す。私達人魚は少し肌が弱くて。あまり長い間太陽の下にいると、
後が大変なもので……」

育ちが良いせいか、幼さの残る見た目に反して、フランムの言葉遣
いは丁寧なものだ。

「それはわたしも同じ。それこそ気にしないで。で、今日は何の話
しようか?」

一人が真夜中に待ち合わせて何をやっているのかといえば、何の

「とにかく世間話である。

「陸と海とこの生活環境の違いから来る文化の違いがある」と面白いことりしゃ。

あまり話題がないサラサだが、大して面白いわけでもない話でも、フランは興味津々な態度で聞いてくれるからか、今のところ話すネタがなくて困る心配はしなくてよさそうだった。

「この前わたしの家族の話をしましたから、今日はサラサさんの家族の話が聞きたいです」

「わたしの、家族……？」

フランにしてみれば、何の含みもない提案だったし、話の流れでいつも聞かれて当然のことだが、それでもサラサは自分の表情が曇るのを抑えられなかつた。

すぐにそれを敏感に感じ取ったフランが、不安げにサラサの顔を覗き込む。

「あの、わたしなにか悪いことを言つてしまつたでしょうか？」

「そういうわけじゃないけど……」

眉根を寄せせるフランの頭を撫でてやうながら、せや困った笑顔を浮かべる。

「あんまり楽しい話じゃないけど、いいかな？」

フランが神妙な顔で額へのを見て、サラサは話始めた。

自分が、守人の父と普通の村娘だった母の間に生まれたこと。

父が一人で魔物を倒しに出かけ、そのまま帰らなかつたこと。

その後、母が長年の心労から病を患い、あつといつ間に亡くなつてしまつたこと。

「お母さんは、急に血を吐いて倒れたの。前の日までそんな感じ全然無くて、元気に見えたのに。それから何度も血を吐いて、血を吐く度に瘦せていった。それでも、一度もお母さん苦しいって言わなかつた。……そして、七日田の朝、泣きながらわたしに、「ごめんねつて。それが最後」

いつの間にかうつむき、黙つてサラサの話を聞いていたフランは、話が終わつても口を開く気配がない。

やはり話さない方が良かつたかな、と少しサラサは後悔する。適当にお茶を濁すこともできだが、フランに対してはそうしたくなかったと思つたのだが、考えが浅かつたのかも知れない。

しばらくそのまま波の音だけを聞いていたが、先に沈黙に耐えられなくなつたのはサラサの方だった。

思いつづままに口を開く。

「時々ね、ふつと思うの。わたしは何の為に生まれてきたんだろうつて。なんで今も「うして生きてるんだりうつて」

口にしてから、あれ、と思つ。

「んなことを話したいわけじゃないのに。」

視界の隅でフラムが顔を上げるのが見えた。

なにかどこかのタガが外れた感触、複雑に凝り固まつた感情がこみ上げて、言葉が止まらない。止められない。

「わたしね、お父さんとお母さんの、本当に笑つた顔つて覚えてない。見たことないの。覚えているのは、わたしの為に無理して笑つてる顔だけ。お父さんはわたしの為にたつた一人で魔物と戦つて、お母さんはわたしの為に無理して働いて……一人とも、死んじやつた。お父さんも、お母さんも、最後までわたしのこと心配してた。でも、わたしにそんな価値あるのかな?二人ともいなくなっちゃつたのに、わたしか生きてる意味つてあるのかな……?」

「やめて下せ~!」

とつとめなく吐き出される、誰に対してもないサラサの疑問を、フラムは強い語調で断ち切つた。

歯止めのきかない状態に陥りかけてたサラサは、それで我に帰る。

「サラサさんがそんなこと言つたら、『両親が気の毒です。……なにより、そんな言葉で一番傷つくのは、サラサさん自身じやないんですか?』

はつとしてフラムの方を向くと、その大きな瞳が今にもこぼれ落ちそうなほど潤んでいた。

気持ちの悪い情動はあつといつ間に収まり、すぐに罪悪感に取つて代わる。

サラサは氣まずそつこ田をせりしながら少くへ謝つた。

「……」「めんなさ」

「……いいえ。わたしからお訊きしたのに、大きな声を出したりして、こちらこそすいません。でも、やっぱり、そういうことって口にしない方がいいと思いまーす」

多少ぞこぢらないものの、優しい笑顔でフラムは出来るだけ明るく言つ。

「でも、あの、矛盾してるかもしませんが、そんなふうに感情を見せてくれるのは、ちょっとびり嬉しいです。……だって、わたしを信用してくれてるってことですよね、それって」

フラムの精一杯の心遣いに、サラサの胸は熱くなる。こみ上げる愛しさにまかせて、隣に座る少女を両手で抱きしめる。

きめの細かいむき卵のような少女の肌から、ほんのりとした温もりが伝わってくる。

その温もりが、サラサの心と身体に染み渡つた。

「…………ありがとう」

つむじに向かって囁かれた本心からの感謝に、フラムは頬を染め

てすぐそつとそつと身動きした。

やがて時間が過ぎ、一人はまた会う約束をしてその夜も別れた。

いつものように、千切れんばかりに手を振りながら波間に消える
フラムを見送った後も、サラサはしばらくそこに立っていた。

波の音を聞きながら、サラサは深い皿口嫌悪に襲われていた。

何年も前の話だと、自分の中ではそれなりに心の整理がついていたつもりだった。

それが、いくら他人に話すのが初めてとはいえ、あっさりと自分を失いそうになった。

しかも、あんなにも素直で優しい少女に気を使わせてしまった。

この前の夢といい、今日のことといい、このところ心が弱ってる
気がする。

そう思つた瞬間、サラサの脳裏によぎつたのは、顎に傷のある青
年の顔が浮かぶ。

激しいいらだちが心を占める。

あいつのせいだ。

なんで今更戻つてきただろう。やつと忘れかけてたのに。

あいつのせいで、思い出してしまった。

哀しみと、怒りと、孤独と、寂しさと。

破られてしまつた約束を。

キリッと歯を鳴らして、サラサは家路につく。

用がまだ残る空は、薄い青を取り戻し始めていた。

三章 浜辺に降る雨

1

いつものように、浜辺の木陰で座り込んでいたサラサはこのところの夜更かしが祟ったのか、波の音を子守歌に、木の幹にもたれて居眠りをしていた。

微かに規則正しい寝息が、被つた布の奥から漏れている。

手元から転がり落ちた削りかけだった鉗の柄が、サラサの膝に乗つたままだった。

「…………？」

もそもそと身動きして目を覚ましたサラサは、微妙な距離を置いて座っている人影に気が付いて、ビクッと身を竦めた。その拍子に、膝の上の柄が転がり落ちる。

「あ、すまん。驚かせたか」

横に伸びた枝葉が作る大きな影の端であぐらをかけていた青年は、サラサの方に顔を向けた。

「熟睡してたみたいだから、起こすのも悪いと思つてな。……最近、居眠りばかりしてるみたいだが、どうか悪いのか？」

「……またアンタか」

心配そうに尋ねてくるザンの声を聞きながら、サラサは小さな声で呟いて、質問には答えずに、取り落としていた小刀を手に、柄を削る作業に戻った。

「……のとこる、ザンは一日と開けずによつてくれる。

何の用事があるのか知らないが、大抵の場合ふらりとやつてきては、なにをするわけでもなく、サラサから少し距離を置いて座り、黙つて海を見ている。

最初こそ気になつたものの、直発的に話しかけてくることも稀なので、サラサから話しかける義理があるわけでもなく、ここにこのところはザンの存在を極力無視することにしていた。

しばらく黙つて作業を続けていたが、視線を感じてザンの方を見ると、さきほどの一言を発したままの姿勢で、まだこちらを見ているので仕方なく口を開く。

「……アンタには関係ないでしょ？」「

相変わらず素っ気も何もない返事で、会話の続きよつもなく。

あまり居心地の良くない沈黙が降りる。

「あの、な」

ややあつて、ザンが控えめに言った。

「今日、ナオの家に行つて、結婚の話、断つてきた」

「…………そつ」

また長い沈黙。

波の音。

「だから?」

「いや、それだけなんだけどな……」

「ナオ、残念がるだらうね」

ぼそりとサラサが言つと、ザンは小さく呻いて沈黙した。

三度、長い沈黙と波の音が一人の間に流れる。

「アンタさ」

不意に、今度はサラサの方から口を開く。

奇妙な間の後、作業の手を止めず、ザンの方も向かずに口を開く。

「なんのためにここにくるの? 守人つてそんなに暇なわけ? それとも……」

原因不明のこいつと一緒に、偽悪的な感情と少しの自嘲、それに揶揄を込めて吐き出す。

「『魔物の子』を見張るのも、守人の仕事の内なの？」

「サラサー。」

それを聞いたザンの反応は予想外に劇的だった。

両肩を激しい感情に強ばらせ、腰から長剣を鞘(さや)と抜き取ると、その柄をサラサの田の前に突き出した。

「……なによ」

ザンの態度に欠片も怯むことなく、逆に静かな怒りを込めて、ボロ布の奥から深紅の瞳でザンを睨み返す。

ザンはそのまますぐに受け止めて、感情を抑えた低い声で言う。

「この剣に触れてみる」

「は？ なにを……？」

「いいから」

ザンの意図は読めなかつたが、静かな声に抗いがたい物を感じて、サラサは布の下から手を伸ばして長剣の柄に触れた。

よく見ればほのかに燐光を放っているように見えるそれに触れる

と、日向のような温もりと、心地良いなにかがそこから流れ込んでくる不思議な感覚があった。

柄をしつかり握ると、その感覚が強くなる。

「手が、どうにかなったか？」

しばらくその妙な感覚を味わっていると、ザンが訊いた。

柄を放して、自分の手のひらを見る。

特に何の変化も無いように見えた。強いて言えば、少し血色が良くなつたように見える。

黙つてザンに手のひらを見せると、ザンは満足そうに頷いた。

「この微かな光は『破魔の光』って言つてな、元を正せば人間なら誰でも持つてる生命の光だ。魔物は人を襲う。なぜかといえば、生き物の生命の力が奴らの糧になるからだ。そして、奴らにとつては生命の力は火と同じだ。適度であるなら身体を暖めるが、強ければその身を焼く」

長剣を引いて腰に戻しつつ、サラサの手のひらに視線を落としながら続ける。

「だが、人間にとつては、命は命。いくら強からうが、害はほとんどない。逆に、破魔の光は病気や怪我の治療にだつて応用できる。今の光に触れて平氣なお前は……お前自身がどう思つてようが、確かに人間だよ。冗談でも、そんなこと言わないでくれ」

わきほどの激情が嘘のよつて、どこか悲しそうなザンと田があつてしまい、反射的にサラサは田を逸らす。

細く溜息をつき、ザンが付け加える。

「……なにより、お前がそんなことを言えれば、叔父さん達が悲しむだろ」

その一言に、劇的な反応が起つた。

「あんたに、なにがわかるつてのよー。」

突然立ち上がり、凄まじい剣幕で怒鳴つたサラサは、ボロ布の奥から怒りに燃える深紅の視線をザンに叩きつけた。

「突然いなくなつて！ またひょっこり現れたと思ったたら、なに？ いまさらどこの面下げて説教なんてしてんのよつて？ …」

ザンが今までサラサから聞いたことのない大声と、見たこともない激怒だった。

怒りに満ちて自らを射貫く炎の色をした瞳に、ザンはつかの間傷ついたような表情を見せたが、すぐに田を逸らし、そのままサラサに背を向けて無言でその場を去つた。

どこか悄然としたその背中が見えなくなるまで見送つたサラサは、立ち上がる時、無意識に掴んでいた砂を怒りにまかせて砂浜へ投げつけた。

「お前なあ。飲むのは構わんが、なにも言わんで、ただひたすら溜息だけついてんのは、勘弁してもらえんか。辛氣くさくてかなわん」

すっかり陽も落ちて、辺りはすでに暗くなっている。

例によつてブギの作業場の片隅で、相変わらず適当にしつらえた場所で、一人はひたすら飲んでいた。

正確に言えば、痛飲してこるのはしてこるのは一人だけだが。

「そ、ういや、ナオにはちゃんと話したのか？」

「……ナオの両親には、今日正式に断りを入れてきた」

台の上に突っ伏したままのザンが、酔いの回った口調で答える。

「本人には？」

沈黙。

「あほう」

容赦ない評価に、ザンは踏み潰されたような呻きを漏らし、台の上で平たくなる。

「ま、困るのはオレじゃないがね。それと、実家にもちゃんと顔出せよ。今日の昼過ぎにえらい剣幕で親父さんが怒鳴り込んできたんだからな。なにしに来たかは聞かなかつたが、多分縁談関係の話だろうとは思つけど」

「いいんだよ、放つておけば」

「オレが困るひとつ。お前をついで寝泊まりせんのは全然構わんが、あの調子で親父さんだけじゃけりゃ来られると仕事の邪魔なんだよ」

「……わかったよ、明日にでも顔出してくるさ」

面倒臭そうに、杯の縁を指でなぞつて居るザンに、ブギは溜息混じりで腕を組んだ。

「お前、その調子だと、サラサともなんかあつたろ?..」

ぐ、とザンが呻く。

今日は早々にザンが酔い始めたせいだ、ブギはなんとなく自分が飲むタイミングを逸してしまい、今日は比較的素面に近い。

ほそつと、ザンは漏らす。

「……オレはどうしたらいいんだろうな」

「そんなんオレは知らん。お前がわからん物を、オレが知るわけ無いだろ?」

「だよなあ……」

「まあ飲め」

「ん

半分溶けたような様子で、手だけ動かして酌を受けるザン。

「しかしまあ 実際のところ、ナオの話は最優先でなんとかした方がいいんじゃ……って」

酌を受けたまま、ザンは寝こけていた。手にした杯が傾き、酒がこぼれ落ちる。

ブギはゆっくり溜息をついて、ヨナを読んで身体を冷やさない為の掛け布を頼み、頬杖をついて友人の寝顔を眺めた。

「頑張れよ」

軽い口調とは裏腹に、その顔には友人に対する優しさが溢れてい
た。

2

半分に欠けた月が、今日も岬を照らしている。

「魔法、ですか？」

可愛らしく小首を傾げたフラムが問い合わせる。

「うん。小さい頃に、人魚は魔法を使えるって聞いたから、本当かなあと思って」

「本当ですよ」

珍しく好奇心剥き出しで訊いてくるサラサに、フランはあっさりと答える。

フランと会うまでは人魚の実在すら疑っていたサラサだったが、生きた証拠が目の前にあるとなつては、好奇心が抑えられないようだ。

そういうサラサの様子は大変珍しいのだが、フランに対して仲良くなつてからは、年齢相応な態度しか見せていないので、フラン自身は特に違和感を感じていないらしい。

「でも、魔法……人間は法術つて呼ぶんでしたつけ？ 人間にも使えるんじゃないですか？」

「ちょっと大きめの集落なんかにいけば、使える人がいると思うんだけどね。わたしの村みたいに小さなところじゃないみたい。婆様は使えるつて聞いたことがあるけど、詠人の戒律とかなんとかで、使つたところは見たこと無いわ」

「じゃあ、本当に初步的なもので良ければ、お見せしましょうか？」

「本当に？ すつぐ見たいな！」

嬉しそうなサラサの表情に満足したのか、フランも笑顔で頷く。

深呼吸してから、人の頭ほどの球体を支える形で宙に両手を伸ば

し、フランは目を細める。その途中、熱心に見つめてくるサラサの視線に気付いて、照れた表情で薄く頬を染める。

「上達すれば、精神集中も一瞬で済むんですけど。わたし、最近ようやくお祖母様から習い始めたばかりなので……。では、いきます」

細く息を吸い込み、ゆっくりとサラサの知らない言葉で何事か呟く。

すると、差し出したフランの両手の上に小さな光点が現れ、それはみるみるうちに握り拳大へと成長する。

熱を感じさせない、白い光を放つ光球は、フランの両手の上で静止していた。

「どうでしようか?」

「へえ……」

物珍しそうにポカンと口を開け、まじまじと光球を眺めるサラサに、少し得意げな顔でフランは笑った。

「海の中でも使える、灯りの魔法です。こんな事もできますよ」

ちょい、とフランが人差し指でつづくと、光球はゆっくりと沖に向かつて移動した。

「ほどよく沖合に出たところで、フランは先程とは違う言葉を口にする。

漂つっていた光球が一瞬縮んだかと思つと、音もなく弾けた。

ゆうくつと消えていく光の残滓を眺めながら、サラサは感極まつたように呟いた。

「……綺麗」

サラサの無邪氣と叫つてもいい素朴な反応に、満足げな顔をしていたフラムだったが、急に表情を引き締めて、居住まいを正した。

「サラサさん、お話があるんですねが」

雰囲気の変わった少女に、サラサが怪訝そうに振り返る。

「あの、突然でびっくりすると感じますけど……」

なにか彼女にとつては重要なことを言おうとしているのだらう、何度か迷う素振りを見せていたが、一度視線を下に向けた後、決心がついたのかサラサの目をまっすぐ見て言った。

「私達の部族で、暮らすつむじはあつませんか？」

「……え？」

一瞬言葉の意味をとりかねて呆然とするサラサに、熱のこもった口調でフラムは説明した。

「Jの前、J両親のことについてから、わたし考えてたんです。サラサさんが人間の村でどういう扱いを受けているかも、想像がつきます。だから、考えた結果両親に相談したんです。そうしたら、お

父様が、サラサさんのお父様を知っていたんですよ……まあ、そのときに無断外出もばれてしまって、こっぴどく怒られましたんんですけど」

そういう割には、さほど答えた様子もなく、フライムは小さく舌を出す。

「お父様が言つには、昔この辺を荒らし回つた魔物は、わたし達の村にもかなりの被害が出たそうです。退治するにも、かなり強力な魔物だつたらしくて、迂闊に手を出せずに一の足を踏んでいて。そうしている間にも犠牲は増えていったので、もう戦うしかない、となつた時に、人間の剣士様が現れて、その魔物を一騎打ちで退治したんだそうです」

「それって……お父さん?」

フライムはサラサの質問に頷くと、表情を曇らせた。

「でも、剣士様も無事では済まなかつたんです。お父様達が駆けつけた時には、魔物もろとも潮の速い場所にはまり込んで流されいくところだったそうです。なんとか追いついた時にはもう……もう少し駆けつけるのが早ければ、剣士様の命を助けられたかもしれませんのに、とお父様は悔やんでおられました」

思わぬところで聞かされた父の最後にまつわる話に、サラサは言葉を失つ。

「……その後、お父さんは?」

「わたし達の習慣では、亡くなつた者は海に流されます。海と一つ

になつて、わたし達を見守つてくれるようだ。特に、勇敢に戦つた戦士は最高の礼を持つて送られます。剣士様……サラサさんのお父様も最高の尊敬を持つて送られると、そう聞いています」

「そつか……」

ならきっと、お母さんとも会えたはずだよね。

そつと安堵の息をつく。はつきりとした父の最後を知らなかつたことで、心の片隅に引っかかっていたことだ。

「お父様は仰つてました。あの勇敢な戦士は我々の恩人でもある。その忘れ形見が一人で生きているなら、部族の掟を曲げてでも受け入れよう、と。サラサさんが望むのであれば、受け入れるとはつきり約束してくれました」

そこまで言つて、フランはサラサの反応をうかがう。

「……如何でしようか?」

「如何でじょうかって言われても……」

「わたし達人魚と同じ生活をすることに不安がおありますか? それなら、なにも心配いらないとお祖母様が保証してくれましたし」

なにかそういう魔法的な手段があるのかな、とサラサはボンヤリ考えた。

戸惑いを隠せないサラサに対し、フランは情熱的に言い募る。おそらく、誰よりも話に乗り気なのはフラン自身なのだろう。

ナオのことが少し気にかかつたが、自分がいなくなれば、ナオにあれこれと面倒をかけることもなくなる。迷惑をかけずに済む。

断る理由はないはずだった。ほんの少し前までは。

「……『メンね。少し……考えさせてもらひやるかな?』

口から出た言葉に、誰より驚いたのはサラサ自身だった。

胸をよぎったのは「お前は人間だ」と言つた、顎に傷のある浅黒い青年の顔。

自分でもはつきりとは言えない、心の奥の引っかかり。

怒りか、それとも、もつと他になにかか。

サラサの答えにフレームは多少不満そうだったが、こじはぐく」とにしたよつだつた。

「サラサさんにとって大事なことじょうから、お待ちします。お心が決まりましたら、いつでも言つて下さこね」

そう言つて笑顔を浮かべるフレームの前を、螢のように小さな燐光が横切つた。

「あ、迎えが来たみたいですね」

「迎え?」

「ええ。さつきも言いましたが、わたしここへは人目を盗んで来てましたので……。お父様にお願いして、サラサさんと会つことは赦していただけたんですが、送り迎えをつけられてしまって」

といつことは、今の燐光はその迎えの人魚が飛ばしたものだろつか。

夜の海に目を向けたサラサだったが、暗い波間にそれらしい影も見えなかつた。

そしてまた一人は、会う約束を交わしてその夜も別れたのだった。

3

「あのね、ザンがね、あたしとの縁談断りに来たつて……」

ぐすぐすと鼻をすすりながら、つつかえつつかえナオが言つ。

太陽は中天にかかり、夏も本番に入つたことを示す、強い陽光が白い砂浜を焼いている。

気温は高いが、海を渡つてくる風が間断ないので、それほど暑さは感じない。

いつもの場所で、鍔の柄を磨く作業をしていたサラサを訪ねてきたナオは、その正面に正座している。

両膝の上に置いた握りこぶしの上にぽつぽつと涙が落ちて、こぶしを逸れた涙がワンピースの上に染みを作っている。

サラサは作業の手を休めてナオの話を聞いているが、どう慰めたものか困っている様子が見て取れた。

「…………あたし、なんか嫌われること、したのかな…………？」

正直に言つて、サラサは困り果てていた。

ザンから破談の話を聞いた時から、おそらくなにかしらの話をしに、ナオが訪ねてくるだろうとは予想していたが。

ナオから相談を受けるのが嫌なわけではまったくないが、相談の内容が内容だけに、どう答えたらいいものか想像がつかない。

「あいつには会つたの？」

サラサの問いかに、ナオが首を横に振る。

「…………なんか、最近出歩いてばかりいるみたいで、全然会えないの……。誰にも行き先、言つてないみたいだし……」

「そつか……」

まさかじょっちゅうに来てるとも言えず、サラサは口を濁してしまつ。

そう言えば、今日はまだ姿を見せない。ナオと鉢合わせされると

困るので、有り難いと言えなくもないが。

なんでこんなこと考えないといけないのかと、この場にいない青年に腹を立てつつ、どこか後ろめたい気持ちでサラサはナオに向かつて言った。

「とりあえずは、あいつと直接はなしてからじゃないかな？ 色々悩んでたところで、本人に聞かないと判らないだろ？」

「うん……、そう、だよね」

ナオが一度盛大に鼻をすすぐ、多少は落ち着いたようなのを確認してから、サラサは柄を磨く作業を再開する。

濡れた革の切れ端に砂をつけ、「じじ」と木肌を磨く。

ようやく泣きの発作を引っ込んだナオが、なにかに気が付いたのか、サラサを少し泣き腫らした目で不思議そうに見つめた。

その視線に気が付いて、サラサがまた手を止める。

「どうかした？」

なるべく優しくサラサが訊くと、ナオは少し首を傾げながら逆に訊いた。

「サラサ、なにか変わった？」

「え？」

「なんだか、雰囲気が少し変わったみたい」

サラサは言葉に詰まつた。

「このところの色々とあったせいで、知らない間にそれが表に出ているのかもしない。」

ナオが不思議そうな顔で、サラサを見つめる。

ふとナオにならフランのことを話しても大丈夫か、と思った。
妙に言葉を濁して心配をやわらぐよつ、ある程度本筋のことを話した方がいいのかも知れない。

余計な心配を増やさないように、フランの説いてのことだけ伏せておいて。

意を決して、サラサは切り出した。

「ナオ、実はね……」

天幕の中に入ると、老婆が珠の前に難しい顔で座っていた。

「用事だつて？」

「ああ」

その側までザンが歩み寄ると、老婆は片眉を吊り上げてその顔だ

け確認すると、すぐに田を珠の方に戻す。

夏の日差しに炙られているはずなのに、黒い天幕の中はヒンヤリとして心地よく澄み、何らかの力が作用しているのは明らかだった。

「このところの深酒が祟つて、少し一口酔い気味なザンの頭に心地良いい。

折りたたみ式の椅子を勝手に出してきて、老婆の横に座る。その手元を覗くと、琥珀色の珠の奥で微妙な色彩が揺らめいていた。見ものが見ればメッセージとして読み取れるらしいが、ザンにはちんぶんかんぶんだ。

頭が痛くなつてきそうだったので、老婆の方に田を向ける。

真面目な表情で皺だらけの田もとを珠に注ぐ横顔を見つつ、ザンは昔、師匠と一緒に行つた仕事でみた古いミイラを思い出した。

「……なにか、いま失礼なことを考えなかつたかい？」

「いや、別に」

急に振り向いて睨んでくる老婆に、明後田の方を向きながら誤魔化すザン。

老婆は、ふんと鼻を鳴らしてから、上体を少し起こして田もとを揉んだ。

「で、用事なんだろ。なんだつて？」

「ああ……つて、あんた、なんだか酒臭いね。暇だからって飲んでばかりいるんじゃないよ。まったく」

ぶつぶつ言いながら、珠に手をかざすと、その中の色彩が消える。

「朝一番で届いた『伝言』でね……どうやら、働いて貰つことになりそうだよ」

「魔物か？」

老婆が頷く。

「立った今一つ田の『伝言』が届いたんだがね。西の村の守人がやられたらしい」

一瞬でザンの表情が引き締まった。

「死にはしなかつたらしいが、しばらくは起き上がれない」と。とりあえず追い払うには成功したらしいが、魔物はそのまま姿を消したそうだよ。潮の道から言って、この辺りにくる可能性は高いね。やられたって守人は、坊やが来る前はこの村にも何度も来て貰つたが、若いがそれなりに腕の立つ男だったはずさ。坊やの腕じやちよつと手に余るかもね。坊や、『水上歩行』はできたかい？」

「無理だつて。こんな田舎に派遣されるような下つ端で、そんな高等技術使えるやつはほとんどないよ。知ってるだろ？ 叔父さんが特別だつたんだよ」

「アレも、ここに来た当初はペーぺーだつたんだがね。まあいいさ。とりあえず、協会には応援を要請しておいたけど、それまでに被害

が出ないといいが……。そういうわけだから、覚悟だけはしておいてくれ」

「……解った」

ザンは緊張した面持ちで頷く。

「それと、もう一つ」

老婆は身体」とザンに向き直り、難しい顔で言った。

「サラサのことか」

「サラサ?」

「真夜中には、サラサを見かけたつてのがいるんだ」

「真夜中? ビード?」

「人魚の岬だ。沖で夜釣りをしていた奴が、人魚の岬の辺りで変な光が見えたってんで、好奇心に負けて近づいて見たんだとさ。そしたら、あの娘と人魚の子供が一緒にいるのを見つけたそうだ」

「へえ、どんな経緯で知り合つたんだ? じこらの部族は人間嫌いで有名なのに」

「……坊や、事の重大さを理解していないね?」

脳天氣とも言えるザンの答えに、皺だらけの眉間にさらに皺を増やして老婆が溜息をつく。

「坊やは央都暮らしが長くて忘れてるみたいだけどね、ここらみた
いに辺鄙な田舎じやあ、人魚は魔物の同類みたいに思われるんだ。
特に、昔から人魚との交流が皆無に等しいここいらじやあ、そういう
迷信は根深いんだ」

現在、央都のように大きな都市部や、公益の盛んな港町など、異
種族との交流がある程度ある場所では、人魚も世界に多数存在する
人類の一つとして認識されている。

だが、学問水準のあまり高くない地域では、今でも老婆の言つよ
うな迷信の類が、驚く程広く信じられている。

平均的に他種族との交流が少なめの人魚達に関しては、その傾向
は特に顕著で、様々な流言飛語の結果起きた悲劇は枚挙に暇がない。
「まあ、人魚の件だけなら、それほど焦る必要も無かつたんだがね。
今までだつて、あの娘に関するその類の噂は絶えたことがないんだ。
今朝の『伝言』を見るまでね」

珠の上に手を乗せて、ザンを見やる。

「……どうこいつ意味か、解るね？」

老婆の確認に、ようやく理解したザンの顔色が、さつと青くなる。

「時期が悪すぎる。その話を持ってきた奴には、きつく口止めして
帰したけど、噂が広まるのは時間の問題だつね。そこそこ魔物が
出たなんて話が出れば、連中はすぐに二つの話を結びつける。そう
なつたら……」

ザンが生睡を苦労して飲み込む。

口の中が乾いていた。

過去に起きたあの一件は、ザンの中にも暗い影を落としている。

老婆は溜息をつく。

「あの娘のことは、坊やに任せらるからね。頼んだよ」

「…………解った」

決意の表情で再度頷く。

「言つておくけどね、坊や」

厳しかつた老婆の表情が、ほんの少しだけ柔らかくなる。

「命は粗末にするんじゃないよ？ アレだつて、なにも一人でいく必要は無かつたんだ。あと一田も待てば応援が着いたつていうのにね。……危なくなつたら逃げたつていいんだよ。焦つて自分で自分を追い詰めないようにな」

「…………ああ、ありがとう婆様」

強ばつてはいたが、老婆に笑顔を見せて、ザンは天幕を出て行った。

老婆もまた大きな溜息をついて、村長に現状の説明をしに行く為

に天幕を後にしてた。

4

雲行きが怪しくなつてきた。

いつの間にか水平線から湧き出た黒雲が、怪物の唸り声のような雷鳴を響かせて、驚く程の速度で空を覆い始めている。

雨が近い。

この時期、取り立てて珍しいことでもないので、サラサは大して慌てもせず、手早く小物をまとめて帰り支度を終えると、仕上げ中の柄を持って立ち上がった。

歩き出したサラサの心に、様々な事が浮かぶ。

ナオのこと。

フレームのこと。

そして……。

少し前までは、取り立てて深く考える機会もなかつた諸々。

一人になつてから今までずっと。

なにも変わらない平坦な日々がただ黙々と、いつか自分が死んで消えて無くなる時まで続いていくものだと思つていた。

そう決めつけていたことに気が付く。

不思議だな、とサラサは思つ。

自分が他人との関係で思い悩むのも、今の生活を振り返る自分も。

少しだけ、そんな自分を笑う。

「サラサ！」

唐突に背後からかけられた声に、浮かびかけていた笑みはすぐに消え、代わりに苦々しい表情が浮かぶ。

ゆつくり振り返ると、随分遠くから声をかけられたような気がしたのに、もうすぐそこまでザンが来ていた。どうやら走ってきたようだが、その息はほとんど乱れていなかつた。

口を開こうとするザンの機先を制して、サラサが相変わらずの無愛想で言った。

「わたしはもう帰るから、好きなだけここにいれば？　すぐに雨が降つてくると思うけど。濡れるのが嫌なら、とつとと帰つた方がいいんじゃないの？」

こべもない言葉に、ザンは田に見えて怯むが、引き下がるつもりは無いようだった。

「……お前に話があつてきたんだ」

「わたしには無いよ」

真剣な声色のザンを簡潔に一蹴して、歩き出さうと背を向けたサラサの背中に、ザンの言葉がぶつかる。

「真夜中に、人魚と会つてゐるんだって？」

ぴたり、とサラサの足が止まつた。警戒心剥き出しで振り返る。

「……なんでアンタが知つてんのよ」

「本当なんだな」

「だつたら、なに？」

もともと嘘つてもいられないサラサは、あつさりザンに聞い返しながら、少し考える。

フランとあつてることを話したのはナオしかないが、それはつゝかつきのことだ。ザンの耳に入るには早すぎぬ。

もしかしたら、村の誰かに見られていたのだろうか。

人魚が魔物と同じように見られているのは知つていたし、サラサ自身も割と最近まで同じ感覚でいた。

だが、それほど長い付き合いとは言えないが、フランが珍しいほ

ど素直で優しい心の持ち主だと実感した今では、例え魔物だらうとなんだろうと、彼女を庇つつもりだった。

「彼女が魔物だというのなら、父を死地に追いやり、母を見殺しにした連中は何だというのか。」

サラサの警戒心が判らないわけがないが、それでもザンは決意の顔で言う。

「人魚とは、もう、会うな。いや、会わないでくれ」

サラサの爆発を覚悟していたザンだったが、予想外なことにサラサたつぱりと沈黙した後、静かに口を開く。

「……アンタは守人サマだもんね。そう言つと思つたけど。でも、それをわたしが聞かなきやならない義理はないよ。……もし、あの娘に手を出すつもりなら、わたしはどんなことをしても止めるからね」

静かな迫力を込めて宣言するサラサに、ザンは一瞬訝しげな顔をしたが、すぐにその勘違いに気付いて慌てて言い訳する。

「い、いや、違うんだ。その人魚をどうしようって話じゃない。守人の修行に魔物の勉強も入ってる。魔物と人魚の間に何の関わりも無いって事は知ってるよ。そつじゃないんだ」

話してもいいのかどうか少し迷つてから、慎重に言つ。

「婆様の話だと、この辺に魔物が出る可能性が高いんだと。もちろんそいつと鉢合わせしないように、夜はなるべく出歩くなつてのも

ある。実は……お前が、夜中に入魚と会つてところを見たつて奴がいる。一応婆様が口止めしてくれたらしいが、どうしたつて噂は広まる。どうこうとか解るだろ?」

「……解らないわ」

サラサが険悪な態度を崩そとしないので、ザンにはとほけているのか本当に思いつかないのか判断がつかない。

「オレは人魚が魔物じゃないことを知ってるが、村の連中はそうじやないってことだ。噂が広まつて、その上に魔物が出て被害が出たりしたら、それがお前せいにされちまつかもしれない。そつなつたら……」

言い淀んで、ザンは足下に視線を落とした。

「あの時と、同じことが起つるかもしれないんだぞ……」

サラサの肩がぴくりと動く。被つた布がずれて、その表情が完全にその奥へ隠れる。

背を向けながら発せられたサラサの声は、ザンの不安を煽るほどに静かで落ち着いていた。

「……おなじじゃないよ」

「なに?」

「おなじじゃないよ。もつ、お父さんもお母さんもいない。誰もわたくしの為に犠牲にならない。……わたしが消えれば、それで済むよ

「サラサー！」

「うぬせこつー！」

思わず声を荒げたザンに負けない声で、サラサが噛みつくような勢いで振り返りつて怒鳴る。

その勢いでボロ布が頭から外れ、真珠色の髪と白磁の肌、深紅の瞳が現れる。

怖いほどに整った顔には、激情が揺らめいていた。

「前にも言つたでしようが！ アンタになにが解るの！ わたしに関わるな！ わたしを放つておいてよー！」

「放つておけないんだよつー！」

どこか悲痛な色を滲ませたサラサの態度に耐えきれず、ザンも怒鳴り返す。

明らかにそれまでとは違つた葉の響きにて、サラサも口をつぐむ。

ザンは感情を爆発させたことに恥じ入ったのか、少し赤面しつつ一転して静かに続ける。

「……お前は、もつ忘れちまつたかもしれんけど……。昔、お前と約束したんだよ。叶つてやるつて。なにがあつても、お前を叶つて……だから……」

口にしゃべるついでにいたたまれなくなってきたのか、語尾が消えていく。

サラサはそれを耳にした途端、ひどく傷ついたような表情で背中を向けた。

それは、ずっと昔に交わされた約束。

子供の頃の約束だ。

サラサにとっては破られてしまった約束。

忘れるはずなどない。

忘れられなかつたからこそ

「…………こまわら、なによ…………」

サラサの背中が頼りなく震えた。

「…………ひとつに、したくせに

その言葉は、怒りと拒絶という前の堤防から漏れたひとしづく。

「…………お父さんがいなくなつた時も」

忘れられなかつたから。怒って見せて拒絶しなければ、閉じ込めておけなかつたもの。

「…………お母さんがいなくなつた時だつて

サラサの足下、乾いた砂の上に、ポツリと黒い染みができる。

次々に増えていく。

雨はまだ降り始めてはいない。

「…………寂しくて、悲しくて、苦しくて…………どうしようもなかつたの
に…………」

最初のひとしづくが漏れてしまえば、後は崩れていくだけ。

「…………いなかつたくせに……」

怒りも、拒絶も、その上に乗せていた物は、すべて崩れて流され
ていく。

「わたしのことおこで、いなくなつたくせに……」

後に残るのは、哀しみと孤独に満ちた、幼い魂だけ。

塗り固めて、押し込んで、遠ざかることでしか守れなかつた心。

気持ちは溢れ出し。

溢れ出した気持ちは、しづくになつて落ちていく。

「そんなの、しんじられるわけ……ないじゃな……」

それは初めて晒された本当の気持ち。言葉にできなかつた言葉。

サラサの哀切に満ちた背中を眺めるザンの顔は、蒼白に近かつた。

頭の中を、ブギの言葉がぐるぐると回っている。

大きな失敗を一つ……いや二つか？　してるんだ。

ようやくその意味を理解した。

自分が知らずに犯していた過ちに、ようやく気が付いた。

この少女を守るために必要だったのは、戦う力などではなかつた。

必要だったのは、ただ側にいてやること。ただ、よりそつて温もりを与えてやることだけ。

戦う力を必要としたのは、自分だ。

少女のためなどではない。

逃げていた。

逃げたのだ。

無力な自分から。

無力であることに耐えられない、自分自身の心から。

村を出るなら、なぜ少女を連れて行かなかつた？

できたはずだ。

や、りなかつたのだ。

少女を連れていき、その先で少女を守り抜けないことが、恐ろしかつた。

臆病者だったのだ。それはおそれぐ、今も。

少女の為だと言つて、最悪の卑法と逃亡を犯したことにも無意識で。

守ると口こしなが、「から逃げだし、他の向よりも少女の心を傷つけていたのは自分だ。

足下が揺れる。グルグルと景色が回つていた。

少しでも力を抜けば、砂浜の上に倒れてしまいそうだ。

手を伸ばせば届く距離にて、少女の背中はあつた。

その背中には、孤独と寂寥だけがあつた。

簡単に聞こきそうな距離が、とてもなく遠く感じる。

恐怖がこみ上げてくる。

やはり、自分は臆病者だ、とザンは骨身に染みて理解する。

だからといって、そのまま卑怯者の臆病者でいて良いはずがない。

もう、手遅れのかも知れない。

無駄な足掻きなのかも知れない。

なにかをする資格すら、すでに自分にはないかも知れなかつた。

それでも、いまこの出来ることをやらなければ、最悪のまま終わってしまう。

指一本動かすのも、足を一步踏み進めるのも。

今まで経験してきたどんなことよりも、力と勇気を必要とした。

雨が、ぱつぱつと降り始める。

驚く程思い通りにならない両手を差し伸べ、地面に張り付く足を進め、少女の両肩に触れる。

その肩は弱々しく震えるが、そのまま逃げもせず、かといって振り向きもしない。

意を決し、可能な限りの優しさと、細心の注意を持つて。

乾いた砂で出来ているかのように、やっとやの背中を抱きしめた。なにを口にしても、言ひ訳にしかならないよつた気がした。

想いは次々と浮かび消えていく。

だが、本当に言わなければいけないことは一つしかなかった。

たつた一言だけ、全身全靈で絞り出す。

「…………」

少女にしか聞こえない声で呴かれたのは、短く不器用な謝罪の言葉。

真にその罪を自覚した者の、懺悔の言葉だった。

それは、少女の心に残っていた僅かな強がりを、綺麗に吹き飛ばした。

サラサは泣いた。

長い間、我慢し続けていたすべてを吐き出すよつ。

大きな声で、幼い子供のよつ。

それでも、青年にすがることなく、両の拳を力一杯握りしめて。すがってしまえば、もう一度と立ち上がることができなくなってしまいそうだったから。

雨が勢いを強くする。

急速に強まつていく雨は、流れるものを、一人の間にあつたささやかで強固なにかを、まとめて洗い流し、掻き消していく。

そして。

誰かが走り去る、小さな足音もまた、搔き消してしまった。

* * * * *

『あなたは、わたしのことこわがらないんだね?』

重なり合つ木々の枝葉が作り出す日陰の下、ボロ布を被つた幼い女の子が言った。

『みんな、わたしのことこわがるのこ……』

下を向いているので表情は伺えないが、女の子が寂しげな顔をしているのは簡単に予想がついた。

『なんだ、こわがるんだよ

少年はあぐらをかいて、身体を前後に揺りしながら言った。

『こわくないじゃん』

半分が嘘で、半分が本当。

少年も自分の田で見るまでは、この村はずれに住む少女を怖がっていた。

無責任な大人達が口にする、悪意ある噂話を信じていたからだ。

でも、今は。

『だって、そのかみも、めも、ばくはきれいだとおもひよ』

『そう……かな?』

『そうだよー』

被つた布越しでも、女の子が恥じらつ雰囲気が伝わってくる。

『……ありがと』

少年からは見えないが、きっと花が開くように可憐な笑顔を浮かべているだろう。

少年はそれが見たかった。

『ねえ、そのぬのをとつてみてよ

『え?』

『おねがい』

『……じゃあ、少しだけね』

女の子は少し迷つてから、布を肩まで下げた。

現れたのは、満月を削りだして作ったよつて可憐で美しい容貌。

しかし、その深紅の瞳を湛えた田もとこ、やや困ったよつた雰囲気があったのが少年には少し残念だった。

『「あなたにきれいなんだから、かくわなきやっこのに』

『「でも、あつとおひさまにあたつてると、まつかにはれていたいんだもん……』

もう黙つて、悲しそうに元田を伏せる。

少年はそんな顔が見たいわけではないのだ。

『それ』……かくしてないと、みんなこわがるから……

『「ぼくは怖がらないよー。』

女の子の語尾に被せた大きな声に、少女は顔を上げる。

『「ぼくは、せつたにせつたにこわがらないー。』

『……ほんとうに……』

『「そー。』

取れてしまことわづな勢いで、首を縦に振る。

『「ぼくがきみの」と、まもつてあげるー。すとこつしょこころるよー。』

少年の顔を見つめていた女の子の顔が、ゆうくつとはにかんだ笑顔を浮かべる。

『……ありがとう』

それこそが、少年が見たいと思つた笑顔だった。

遠い日の約束。

幼いからこそ、簡単に口にできた言葉。

幼いからこそ、純粋に口にできた言葉。

木々の間から垣間見える海が、きらきらと輝いていた。

遠い日の出来事。

1

サラサにとって、目覚めはいつも不快感と一緒に来た。

寝起きが悪いわけではなく、目を覚ますといふことそのものが、嫌いだった。

悪夢にうなされることがあっても、目を覚まさない方がマシだと思っていた。

暗い小屋の中で目覚め、周りを見回せば、孤独がつのるばかり。だから、人の温もりに包まれて、それらの気持ちを伴わない目覚めは、初めての経験だった。

ついついと目を開けると、見慣れた小屋の中、まだ火を上げている炉の薪が映った。

頭と地面の間と、背中全体に温もりを感じる。

その温もりの持ち主を起しきなこよつて、サラサはやつと身体を起こした。

なめらかな素肌を滑つた布が太股の上に落ち、一糸まとわぬ上半身が現れる。

部屋の中は炉の火に照らされて意外に明るい。薪の燃え方を見ると、寝入つてからさほど時間は経っていないようだ。

少し身動きすると、身体の奥に残つた鈍い痛みの残滓を感じる。

初めて他人を受け入れた痛み。

痛みなのに、それは不思議と心を満たしてくれた。

視線を下に向けると、すぐ横で寝息を立てる顎に傷のある青年の顔が目に入る。

まるで、寝ていてもその腕の中にあつたものを守るよつて、身体をほんの少し丸めていた。

その寝息は規則正しく静かで、微かにゆっくり動く腹部を見なけば、死んでいる勘違いしてしまいかうだった。

サラサは相手を起こさないよつと身体を離して、掛けていた布を青年に掛け直してやる。

そのまま、すぐ側で青年の身体をつぶそに眺めた。

傷だらけの身体だ。

さつきまでサラサの頭が乗っていた腕も、足も、身体も。傷ついていない場所を探す方が簡単だった。

ほとんどは古傷で、それほど目立つものはないが、青年の過ごしてきた時間が過酷なものだったであろうことは、一眼でわかる。一際目に付く、腕の内側から破裂したような大きな傷を見、青年の顎にある、おぞらべ一番古い傷にそつと触れる。

痛かつただろ？

辛かつただろ？

怖かつただろ？

無数の傷は、それでも青年が逃げなかつた証拠だ。

痛くとも、辛くとも、それから逃げなかつたのは何故か。

じわり、と胸の奥が疼く。

それは、じわっじわっと、ゆっくり広がっていく。

決まっていた。

じつと見つめる、青年の幸せそつた寝顔が滲む。

「……謝らなきやこけないのは、ザンじやないよね……」

小さな咳きと一緒に、一粒がこぼれ落ちる。

不意にザンが小さく唸り、掛けられた布を胸の中に巻き込んで寝返りを打った。

その拍子に、ザンの背中に赤く引かれた何本かの細い引っ搔き傷が目に入り、瞬時にサラサの顔が深紅に染まった。

慌てて背中を向け、自分の頬をペチペチ叩いて火照りを冷ます。

心臓がバ力になつたように早鐘を打つ。急速に脳裏に戻つてきた少し前の時間と思い出し、サラサは羞恥に悶える。

もの凄く、もの凄く恥ずかしいことをしたよつた気になつてきた。

なんでこうなつたのか理解できない。

いや、もちろん嫌だつたとかそういうことじやないけど。

でも……。

一通り無言で煩悶してから、なんとか落ち着きを取り戻し、深呼吸する。

ちらりとザンの背中を振り向くが、起きる気配は無い。

もう一度深呼吸してから立ち上がり、炉の側で乾かしていた衣服の様子を見て、すっかり乾いているのを確認すると手早く身につける。

新調したばかりの鉛を手に、そつと小屋を出る。

雨上がりの夜空は綺麗に澄み渡り、一面にきらめく星々がちりばめられていた。

その時、急に襲ってきた悪寒に、サラサは身を震わせた。

雨に打たれたせいで風邪でも引いたのだらうかと思つたが、今日はフランとの約束があった。

それほど深刻な感じでもないし、なによつてフランとの約束を破るのは気が引ける。

歩き出すと、どこかバランスが狂つてころよつた身体の感覚に少し苦笑いし、サラサは小走りに急いだ。

サラサが待ち合わせの北場につくと、それを見計りつてフランが現れる。

「じゃばんは

」いやかにサラサが言えれば、フランもいやかに返す。

こつものよつてフランが水際に腰掛け、サラサもその隣に座る。

「サラサさん、なにか良いことありました?」

開口一番フランが口にする。

「え？ なんで？」

「なんだか、嬉しそうですもの」

「やつ……だね」

カラカラもフライムに負けない笑顔で答えた。

「うん」

「なにがあつたんですか？」

「え」

すいのとカラサの頬に血の色が戻る。

「……内緒」

「意地悪しないで教えて下せよウイー。」

「やのひびきね」

恥ずかしそうに意味ありげな態度を崩さないカラサに、フライムがふくれつ面になる。

「 もう、いいです！」

「めん」「めん」とカラサが笑いながら謝る。

そんな他愛のない会話がじばりく続ぐ。

「やつこえぱですね、サラサさん」

会話が一段落ついたといひで、フリムが申し訳なさそつた顔で切り出す。

ん？ とサラサが顔を上げた。

「じばりく、会えなくなつたうなんです」

「どうかしたの？」

「実は……質の悪い魔物が」の辺の海に出没し始めているみたいな

んです」

珍しく真剣な表情で説明するフリムに、サラサも表情を引き締める。

「お父様が、それと戦う準備を始めました。本當は今日もでかけてはこなこと言われたんだですが、サラサさんとの約束があつたので

……

「魔物が出るかもって話は聞いてたけど、やつか

「あ、でも、もつ会えないってわけではないです。魔物の件が一段落すれば、またこいつきて会えるよ」となります

「うそ、やうだね」

「じゃあ、魔物がいなくなつた後、最初の満月の夜、またここで」

「わかつた」

そして、微妙な間。

「……あの、サラサさん」

フランが控えめに訊いてくる。

「ここ間の話、考えていただけましたか?」

「ここ前の話……」

人魚の村に身を寄せるとこつ話のこと。

耳にした時は、それもいいかと思つたが、今のサラサにはその時の気持ちは無くなつていた。

顎に傷のある顔を思い浮かべながら、フランには本当に悪いことは思つただが。

「ここめんね。やっぱり、ここちにいるよ。こっちに大切なものがで
きりやつたから……ね」

「……そうですか」

残念そうに下唇を噛んでうつむくフランに罪悪感が込み上げるが、仕方がない。

「 フラムはしづらそうしてうつむいていたが、やがて顔を上げると笑顔を浮かべてサラサに尋ねた。

「 その大切なものが、さっきの話と関係があるんですね？」

「 え？、いや、その」

こきなり核心を突かれ、あつとう間に赤面したサラサは、分から易すぎるほど動搖した後、蚊の鳴くよくな声で肯定した。

「 ……うん」

その態度で大体の事情を察したのか、フラムはさらに笑みを深めた。

「 良かつたですね」

「 ……ありがと」

「 本當に、ありがとうねフラム。これからも、よろしくね」
た。
「 はい」

カラサの腕の中で、フラムは恥ずかしうに、だがしつかりと頷いた。

その時、波の音ではない水音と人の気配。

驚いた二人が振り返った。

なにかが襲いかかってきたのだと理解した瞬間、サラサの頭部に衝撃が走り、その意識は急速に遠のいていった。

2

目を覚ますと、まず見慣れない壁が目にに入った。

「？！」

驚きと共に跳ね起きる。

身体は起きているが、まだ頭が半分寝ているのか、よく状況が把握できない。

周りを見回す。

粗末な小屋の風景。炉の炎はすでにかなり小さくなっているが、その他はさして目に付くものもない。

一言で表現すれば殺風景だった。

少しづつ、頭がはつきりしていく。

ガシガシと短い髪に手を突っ込んで、ザンは天井を見上げた。

みるみるうちに顔が真っ赤に染まつたかと思つと、頭を搔く手の速度が上がる。

「……いや、まあ、その、あれだ」

誰もいないのに、なんとなぐ口にする。

雨に降られてサラサの小屋まで避難した後。諸々の時間。寝に入る前になにがあつたのかを思い出して、頭を抱えて転げ回りたくなる衝動に襲われる。

激烈に恥ずかしい。

ちゃんとやれたか心配になる。

央都にはその手の店も多かつたし、先輩に誘われたこともあつたが、なんとなく罪悪感があつて、そういうところに足を運んだことは無かつた。

ただただ必死だつただけで、余裕なんて欠片もなく。そういう経験も少しあしておけば良かつたのかと、真剣に悩みそうになつたところで、ようやくサラサがいないことに気が付く。

「サラサ？」

呼びかけながら、改めて小屋の中を見回した。

その拍子に、背中の引っ搔き傷が少し痛み、また赤面する。

部屋の中にはザンしかおらず、何度も見回しつが殺風景な景色は変わらない。

サラサと知り合ったのは随分前の話だったが、いつもして家の中に入るのは初めてだった。

そのことに感慨を覚えるよりも先に、この殺風景な小屋で、何年もの間孤独に寝起きを繰り返していたサラサの心情を思つと、ザンは身が縮むような思いがした。

それにしても、すぐ隣で寝ていた相手がいなくなっているのに気が付かないとは。

敷布の上であぐらをかき、顔を押されて反省の溜息をつく。

厳しい修行の成果で、物音や気配にはかなり敏感になっていたはずなのに、思いつきり寝こけてしまつた。

「師匠にばれたら、折檻じやすまねえな」

まあ、緊張してたのだろう。なにしろ初めてのことだったので。

あまりに必死すぎて、よく覚えていない部分が多いことに、多少損した気分になりながら立ち上がる。

服が乾いているのを確認して身につけながら、傍らに置いていた長剣を腰に差す。

火が消えないように、炉に薪を何本か放り込んでから小屋を出る。

サラサが下手に遠出しつて、魔物と出くわしてたりしていれば大変だ。可能性としてはそう高くないと思つが、万が一といふこともあら。

探さなければ。

用を足しに行つたのならばすぐ帰つて来るだらうが、炉の薪の様子からすると、遠出をしている可能性がある。

サラサが夜中に遠出するとなると、心当たりは一つしかない。もちらんそこに行つてない可能性もある。それならばそれでいい。

まさかサラサとこゝなるとは想えていなかつたが、最初からサラサに入魚と会わないとを承知させられるとは思つていなかつた。

人魚に対する偏見云々は置いておくとしても、人魚と会うこと自体に危険はないが、その為に夜中の海辺をうろつくのは、いつ魔物が現れてもおかしくない現状では危険極まりなかつた。

だから、何とか説得して護衛について行くことだけでも承知させようと思つていたのだが。

その話を切り出す前にああなつてしまい、機会を逸してしまつた。

心のどこかで、サラサが出かけよつとすれば気がつけむといつ過信があつたのかも知れない。

ザンは舌打ちして自分に毒づくと、人魚の岬に向かつて足を速めた。

林を駆け抜け砂浜に出ようとこゝに立り、ザンの皿の前にふりりと歩み出た人影があった。

ザンが慌ててたたらを踏み立ち止ると、驚きに皿を丸くした。

「ナオ？」

立木の影から現れたのは、確かにナオだった。

ただ、その皿は泣き腫らしたように赤く、どうか虚ろな印象があつた。

「ザン……」

「どうしたんだ、こんな時間に、こんなところで」

「あ、あの……ね、あのね、ザン……」

なにかを言いたそつと口を開けたり閉じたりするが、意味ある言葉は出でこない。

焦れたザンは、ナオの両肩に手を置いて言ひ含めた。

「すまん、ナオ。今、急いでるんだ。それと、もう聞いてるかもしれないが、魔物がこの辺に出る可能性がある。しばらく村から出ないようになつた方がいい。悪いな、気をつけて帰れよ」

早口で言つて、走り出す。

「ザンー！」

その背中に、強い響きを持つナオの言葉がぶつかる。

「サラサのところにいくのね？」

立ち止まつたザンに、問い合わせ投げられる。

ナオの妙な態度に不審を覚えたザンが振り返ると、ナオが俯いたままボソボソと言つた。

「……狡いよね。そんなこと一言も言つてなかつたのに……。あたしあしか、あたしだけが友達みたいな顔してさ……。きっと、あたしのこと、じつはそり笑つてたんだ」

綺麗に焼けた小麦色の両肩が細かく震えていた。

「……今日ね、サラサに人魚のこと聞かされてね。その話してる間、サラサとっても楽しそうだつた……。すごくね、ショックだつた。サラサには、あたししかいないと思つてたのに……。それで、村に戻つたら、ザンがこっちにいつたつて聞いたから、追っかけてきたんだけ……そしたら……」

ぎくりとザンの心臓が跳ねる。

見られたのか。

「ナオ……」

どことなく後ろめたい気持ちで呼びかけると、ナオが顔を上げる。

その顔には引きつった笑みが浮かんでいた。

「ねえ、嘘だよね？ ザンはサラサが好きなわけじゃないよね？ ただ……、そり……同情してるだけ、なんだよね？」

両手を胸の前で絞りながら一歩を踏み出すナオに、思わずザンは一步下がる。

静かで綻りつづくような声色だったが、なにか違和感があった。

氣圧されてさりげなく下がりながら、ザンは痛みを我慢するような顔で唇を噛み、ナオの横を走り抜ける。

「すまん！」

「ダメだよー！」

背中にじぶつけられた声の、ナオからは聞いたことのない強烈さに驚き、ザンは思わず立ち止まって再度振り返る。

両手で薄手のワンピースを握りしめるナオの顔は、悪意で歪んで見えた。

「サラサってば、馬鹿だよね。言わなきゃいいのに……。前にブギから借りた本で読んだことがあるの。人魚って、食べると不老不死になるって迷信があるんだってね？ それを信じて、馬鹿みたいな大金を出すお金持ちもいるんだって。……村でぶらついてる連中にはしたら、大喜びで飛びついてきたよ」

「ナオ、お前まさか……」

「サラサって馬鹿だからね、きっと死に物狂いで抵抗するわ。……
多分、殺されちゃうね。だって、村でサラサのこと人間扱いしてるのは
なんていないもの。やつするのに、躊躇いなんて無いんじゃない
かな」

「ナオッ！！」

ナオの顔を見ていられず、顔を伏せたザンの怒鳴り声にも、ナオ
は怯んだ様子は無い。

ひょっとしたら、ザンの言葉など耳に届いてすらこないのかもし
れなかつた。

「ねえ、ザン。どうして、あたしじゃダメなの……？」

歪んだ表情は、いつの間にか媚びるようなものに変わっていた。

ナオは立ちすくんでいるザンにゅうへじ近づくと、身体を預けて
寄り添い、伏せられたザンの顔を見上げた。

「あたしを選んでよ、ザン……。サラサなんかと一緒にになつたって、
幸せになんかなれないよ？ サラサにできることだったら、あたし
にだつて……」

言いながら、服の胸元に手を掛けたナオは、急に支えを失つて砂
の上に転がつた。

「ザ……っ？！」

自分を見下ろすザンと田があつた瞬間、ナオは言葉を失った。

その目は確かにナオを見ていた。

浮かんでいるのは、燃えるような怒りではなく。

凍りつくような震みでもなく。

ましてや、愛情などでもなかつた。

そこにあつたのは、夜の海のように孤独で深い哀しみ。

信じていたものを失つた哀しみと、激痛にも似た後悔だった。

それを見た少女は、ようやく理解した。

いや、理解していたのにそれを認められず、足搔いていただけだつたのだろう。

もう一度と、自分の望んでいたものは手に入らないこと。

それどころか、失つてはいけないものを、自分から手放してしまつたこと。

なにも言わず、その場から逃げるように走り去るザンの背中を、なにも出来ずに見送り。

少女は嗚咽を漏らし始めた。

手に入らなかつたものを想つて。

失つてしまつたものを想つて。

少女は、ただ、涙を流し続けた。

3

「いやあっ！ 放してっ！ 放して下さい！」

フラムの悲鳴が、消えかかっていたサラサの意識を引き戻す。

「おとなしくしゃがれっ！」

粗野な男の濁声が耳に飛び込んでくる。

痛む頭を押さえる。ぬるりとした感触があった。

ゆらゆらと揺れる視界の中でなんとか上体を起こすと、無精髭の大男が暴れるフラムの腕と首を押さえて動きを封じているのが目にに入る。

視界の隅で、麻袋やロープを手に岩場の影からさりに一人の男が出てくるのが見えた。

ふらつきながら、手に当たった鉤を杖代わりに立ち上がる。頭の

傷は今のところ灼熱感だけで、激しい痛みはまだ来ていない。それよりも、揺れる視界の方が問題だった。

「……やめなー！」

サラサが怒鳴りつけると、フラムを押さえていた大男が、無精髭にまみれた顔に下卑た笑いを浮かべて振り向く。

「なんでえ、案外丈夫じゃねえか。手加減なしでぶん殴ったのによ

「サラサさん！ 血が……！」

「ひらをみたフラムの顔が、いまにも泣き出しそうに歪む。

「めかみをつたう生暖かい感触が頬を通り、顎の先から地面に落ちいくのを感じる。

「お。魔物の子つていうのは、生意気に赤い血をしてんだなあ

「……なんだつて？」

「知らねえのか？ 魔物つてのは黒い血をしてるやつだぜ。なあ？」

本気で言つてるのか[冗談のつもりなのか分からぬ態度で、隣にやつてきた細身の男に問い合わせる。

細身の男は特にそれに答えず、足下に落ちていた棍棒を拾い上げる。どうやら、サラサはそれで殴られたようだ。

一番送ってきた小男が、手にしたロープでフラムを縛り始める。

三人ともサラサの知らない顔だ。なんでここにいるのかも解らないが、今はそんなことを気にしている余裕はない。

「あんたら……いつたいなんのつもり？」

怒気の含まれたサラサの言葉にも男達のニヤニヤ笑いは崩れず、逆に小馬鹿にした笑い声を上げて言つてくる。

「なんのつもりだつてよ」

細身の男が棍棒を構えながら仲間を振り返る。

「決まつてんじゃねえか、なあ？」

「役にたたねえ守人サマに代わつて、魔物退治に来たんだよ」

自らの言葉を微塵も信じていながら丸わかりの口唇。

「お前らあれだろ？」
村を襲う算段でもしてたんだろ、なあ？」

いかにもたつたいま考へましたという態度だつた。

「…………その子を放しなさい」

怒りを抑えたサラサの言葉に、男達はさらなる嘲笑を浴びせる。

「必死だなあ、さすがによ」

今にも倒れそうになりながらも、なんとか立つてこぬサラサの震

える膝を見ながら、細身の男が言ひ。

「そりやそりだら。同じ重やの金と引き替えにできるとなりや、必死にもなれつてもんだ」

「しかしけねえなあ、魔物の子のくせに回じ魔物仲間を売ろうなんてよ」

「やういう邪悪な」と考へてるから魔物なんじゃねえか?」

暴力に酔つてゐるのか、勝手な」と言いながら耳障りな爆笑を上げる男達に眉をしかめるサラサ。

「…………なんの話よ?」

訝しげに聞くサラサに、男達はとも面白やつに言ひ。

「おやおや、じまけるんじゃねえよ。確かに俺たちや」こんな田舎の出だが、これでも央都暮らしさそれなりに長かつたんだぜ?」

「あの娘とも、おおかた取り分ででも揉めたんじゃねえのか」

「だから、なんの話よ?」

自分勝手に言葉を垂れ流す連中にいりつきながら、怒鳴る。

「じほけてんだか、本当に知らねえんだかな。じゃあ教えてやるよ

大男が、二人がかりで取り押さえられているフラムを親指で指し示す。

「人魚つてのはな、不老不死をもたらすんだよ」

「偉そうに。あの娘に聞くまで知らなかつたくせによ」

「つるせえよー！」

茶化してくる小男に笑いながら返し、話を続ける。

「まあ、魔物退治ついでに、余録に預かるつてわけだ」

「不老不死？」

ぞつとしないな、とその単語を聞いた瞬間サラサは思った。

終わりのない生など、苦痛の終わらない拷問のよつなものではないか。

そういう思ひと同時に、そんなものに興味を持つ人間がいること自体に純粹な驚きを感じる。

「さうよ。人魚の肉を食つた奴あ、不老不死になるんだよー。」

「食つ……？ー！」

あまつの」と云ふ、サラサは絶句する。

「魔物を食つなんてぞつとしねえがな。金持ち連中の考える」と云ふ
「わかんねえよな」

「ヤーヤヤ笑いを深めながら肩を竦め、また示し合わせたよつて
ラゲラと男達が爆笑する。

「いてえ！」

突然小男が悲鳴を上げる。その親指から血が流れていった。

猿ぐつわをしようとしたところで油断していたのか、フランクに噛みつかれたのだ。

両手を縛られたまま地面に転がされたフランクは、気丈にも男達を睨みつけた。

海の色をした双眸には怒りの色が宿っている。

「サラサさんもわたしも、魔物などではありません！ わたしたちが魔物だというのなら、貴方たちのような汚らわしい人たちなんだというのですか！」

毅然として言い放つが、それは男達の怒りを呼ぶことしか出来なかつた。

「このガキがっ！」

力任せに震われた小男の拳が、フランクの顔をとらえた。

鈍い音が響き、くぐもった悲鳴を漏らして岩場に叩きつけられたフランクは、鼻血を流してぐつたりと動かなくなつた。

それを見た瞬間、サラサのうなじの毛が逆立つ。

頭が赤熱してなにも考えられなくなつた。

「おい、あんまり手荒く扱うんじゃないぞ。死んじまつて値が下がつちまつたらどうすんだ」

「お、おう。すまねえ」

さすがにやり過ぎたとでも思ったのか、小男が身を引く。

叫びと打撃音が上がつた。

驚いた大男達が振り向くと、細身の男がサラサの鉄で横殴りにされて転がつたところだった。

腹中のすべてを吐き出すような叫びの元はサラサ。

叫びの尾を引きながら獸のよつた素早さで大男へ肉薄するサラサの深紅の両目は、冷たい殺意にぎらついていた。

「うおあつ！」

喉元めがけて突き出された鉄を、大男はみつともなく転がりなら避けた。

空振りした鉄を引き戻し、流れた体勢を整えながら振り返ったサラサが、もう一撃を狙う。

「い」の野郎つ！』

サラサの一撃目よりも、寝転がつたまま突き出された男の足の方が僅かに早かつた。

自分から飛び込むような形で腹を蹴られたサラサは、身体をくの字に折り、再度岩場に勢いよく転がった。

腹を押さえて呻くサラサを、駆け寄ってきた小男と細身の男何度も蹴りつけた。

頭を蹴られて意識が飛びそうになり、腹を蹴られて中身を吐き出す。背中も手足も全身くまなく蹴られた。

すぐに大男もそれに加わり、やがて男達が息を切らせる頃には、サラサに立ち上がる気力も体力も無くなっていた。

「まったく、魔物の子のくせによおー。」

ボロ雑巾のようになってしまったサラサに唾を吐きかけながら、大男はその背中をさらに踏みつける。

苦鳴を漏らす体力も残っていないサラサの喉からくぐもった音が漏れるが、そのまま動く気配は無い。

「さつき話してみて、なんとなく状況が飲み込めたぜ。おい、良いことを教えてやるよ」

乗せた足を揺すってみると、やはりサラサは無反応だ。すでに気を失っているのかもしれないが、大男は構わずに続けた。

「俺達にな、お前らのこと教えてるのは、詠人のババアのところに

出入りしてゐる、綱元のところの小娘なんだよ」

サラサの胸中がぴくつと震えた。

朦朧とする意識の中で、サラサは今の話を理解する。

拒絶反応のまゝに意識が拒否するのを感じながら、言葉の意味を理解しようとする。

ナオが……？ なんで……？

グルグルと回る視界と同じく、疑問が頭の中を回る。

「なんだかしらねえが、よっぽどあの娘の恨みを貰つたみてえだな？」

蔑みのたっぷり含まれた大男の声は、サラサに届いてはいなかつた。

どうして。

それだけがサラサの胸中を支配していた。

直感でも、理性でも、男の言葉が真実だと判つた。

ほんの少し前まで体中に満ちていた怒りなど、どこかへ霧散してしまつた。

痛みでも、悲しみからでもない涙が、知らずに滲んでいく。

「なあ、で、」ニツビリある。

「頼まれたとおりに、楽しんだ後で殺すか

「げ、俺はイヤだぜ。魔物の子なんかと」

「なに言つてやがる臆病もんが。土産話^{ビリ}いか武勇^{ムヨウ}だぜ」

男達の身の毛のよだつ余話^{ビリ}も、サラサの耳には届いていない。

今サラサの胸を満たすのは悔しだ。

悔しくて、悔しくて、堪らなかつた。

父が死んだ」とも。

母が死んだ」とも。

自分が魔物の子と呼ばれる」とも。

フラムが魔物と呼ばれ、下らない事の犠牲になつてしまつ」と
も。

ナオのこと。

すべてが悔しかつた。

抗いきれなかつた。

もう身体も動かない。ただこつして転がつてゐるだけ。

涙が一筋流れる。

男達に氣取られなによつて、鳴咽を噛み殺す。

だが、噛み殺しきれなかつた言葉が、涙と一緒に微かに溢れる。

生まれて初めて、他人に求めた。

「…………ザン…………助けて…………」

誰にも届くはずのない、小さな小さな声だった。

「おい」

それは、静かだが聞く者を竦ませずにはおかない、焼けた鉄のような怒りの声だった。

肉と骨を打つ鈍い音と、カエルが潰れるよつな悲鳴が続けて三二つ。

そして、不意にサラサの背中が軽くなる。

「あ……」

痛む全身を無理に無理に起こして見上げたサラサの目に映つたのは、顎に傷のある浅黒い青年の顔。

みるみるうちにその姿が滲んだ。

「ひでえな……無理に起きるな

優しい声。

しゃがみ込んだ青年が手を差し出し、サラサの身体に触れる。そこから、田向のような温もりが体中に広がっていく。

その温もりが届いた場所の痛みが次々に薄れしていく。

不思議に思ったサラサがザンを見ると、月明かりの下でその身体がボンヤリと発光しているのが判る。

その光はよく見れば、サラサの身体も包んでいた。田を落とすと、腕の内出血が見る間に薄れていいくところだった。

「骨がやられて無かつたのが幸いだな……」

あらかたの傷が薄れたところで、ザンはサラサの肩を抱いて囁いた。

「すまん。遅くなつた」

その申し訳なさそうな顔を見つめるサラサの目から、今度は大粒の涙がぼろぼろとこぼれる。それを隠す為に、ザンの胸に顔を押し付ける。

「まだ、どつか痛むのか？」

心配そうに問い合わせてくるザンに、サラサは顔を押しつけたままで振りを振る。

「起きたらいなかつたから、心配したんだぞ」

「……うん」

田元をこすりつづザンから身体を離し、差し出された手を借りて立ち上がる。

「てめえ、ビツから湧いて出やがつた？！」

殴られて吹っ飛んだとは思えないほど離れた場所で、顔面を押されてのたくつていた大男が、ようやく立ち上がって怒鳴る。よく見ると前歯が三本無くなっていた。

同じく倒れていた一人も、頭を振りながら立ち上がり、無残に変形した顔面でザンを睨みつける。まるで、得物を横取りされた野良犬の風情だ。

「うるせえ」

ザンの低い桐闇に、男達がピタリと黙り込む。

「……てめえらしさ、覚悟はできるんだろうな？」

髪が逆立つような怒りの形相と怒氣、それにも関わらず静かすぎる口調に、それを向けられてるわけでもないサラサまで竦み上がりそうになる。

男達も田元に見えて怯んでいるが、数の有利で気が大きくなっているのか、無謀にも踏みとどまっていた。

「けつ！ 魔物を殺すのが仕事の守人サマが、その魔物にたらし込まれてたら世話ねえぜ！」

べつ、と血の混じった唾を吐き出しながら、侮蔑と悪意を込めた台詞も吐きつける。

かつと頭に血が上つて飛び出さうとするサラサを、ザンはそつと押しどどめる。

「てめえらの勘違いを正してやる」

言いながら、ザンは少し強い力でサラサの肩を抱き寄せる。

「まあ、オレも勘違いしてた時期があったからな。……いいか、守人の役目はな、魔物を殺すことじゃねえ」

隙の強い視線で男達を睨めつけながら淡々と口にする。

「守人の役目は、その名の通り守ることだ。魔物と戦うのは守るべき人間の為で、目的じゃねえんだよ。こいつは……」

サラサの肩を抱いた手の力が少し強くなる。

「オレが、すべての力を使っても守るべき女だ。魔物なんかじゃねえ。守るべき、この世で一番、大切な人間だ」

乾いた砂が水を吸い込むように、言葉がサラサの心に吸い込んでいく。

素直に胸の奥に入つていく。

また涙がにじむ。

ただ、ただ、嬉しかつた。

だが、それを聞いた男達は、泥の塊を口に押し込まれたように顔を歪める。

「けえつ！ 胸くそ悪い！ てめえこそ、人魚が田当てじやねえのかよ？！」

「てめえら下衆ゲスと一緒にするんじやねえよ」

言葉に乗った本物の殺氣に、男達の顔色が一瞬で変わった。

待てをさせられている闘犬に似た表情のザンが言い捨てる。

「こ」で呑きのめして魚の餌にしてやりてえのは山々なんだがな。今なら見逃してやる。とつとと失せろ

問答無用で呑きのめされると思つていたのだろうが、ザンの言葉にかえつて余裕ができたのか、男達は田配せをしあつているものの、立ち去る気配は無い。

金属が革をこする独特の音が波の音に混じつて響く。ザンが長剣を半分程鞘から抜いた音だ。

無言だが明確な意思表示に、男達の間に同様が広がる。

所詮は自分より弱い人間にしか強く出れない「ロロシキ」である。正

規の訓練を積んだ守人相手に敵うはずがない。

なにしろつい最近素手であつさりとあしらわれたばかりだ。しかも今は武装している。怪我では済まないだろ？し、いややるとなればザン自身も済ますつもりはないだろ？

しかし、目の前にぶら下がっている一攫千金に判断力を狂わされていいるのか、躊躇する素振りはあっても、やはり逃げる気配がない。

ザンは呆れと諦めの溜息を吐いて、一步を踏み出そうとした。

「へ、うわああああ！」

突如、小男が宙を飛んだ。

いや、飛んだのではなく、持ち上げられたのだ。

その腰に、ぬめる太いツタのような触手が巻き付いていた。ザンの腕と同じくらいの太さのそれはよほどその力が強いのか、小男の腰は半分の太さになつていて。

その正体をいち早く悟ったザンは、鞘を払い、サラサを庇いながら素早く後退するが、男達は自分の頭よりも高く持ち上げられた仲間に氣を取られ、呆然と立ちすくんでいた。

「下がれ！」

ザンの忠告に、間の抜けた表情で一人が振り返る。

「なにしてんだ！　早く逃げろ、死ぬぞ！」

そこでようやく一人は我に帰つて逃げようとするが、すでに手遅れだつた。

次々と海中から現れる触手に絡め取られ、男達は空中に持ち上げられた。

続いて海から現れようとするそれを睨みつけ、ザンが舌打ちする。

サラサが、ひゅっと息を飲んだ。

4

奥歯が、勝手に力チカチと鳴る。

「なに……？ なんなの……？」

得体の知れない恐怖に襲われながら、サラサは海から上がつてくるそれを見た。

岩棚に掛かった巨大な足はヤシガニに似た分厚い甲羅に覆われ、その表面にはフジツボが張り付いており、先端には三日月型のかぎ爪がのび、岩をガリガリと削りながら突き立つた。

続いて波を割つて立ち上がってきたその姿を見た瞬間、サラサは氣を失いそうになる。

それは、悪夢にも出でこないような異形だった。

海水を滴らせる二角形の陰影を見せる巨躯は小山のような質量を湛え、六本の足に支えられた身体の表面は汚泥のような粘膜でいやらしくぬめっている。

その身体の下から伸びる触手は二十本以上が宙に躍り、捕らえた男達を弄ぶようにゆりゆりと揺れている。

まるで犬とワニを掛け合わせたような異常に大きな頭部には目が無く、巨躯の天辺からぶら下がるよつこくつついていた。

そのぞろりとナイフじみた牙が並ぶ口もまた巨大で、人間など一飲みにできるだろう。

魔物。

サラサはそれを形容するのに、他の言葉を思いつけなかつた。

村人は自分を魔物と呼ぶが、おそらく本物の魔物をみたことなどないに違ひない。

それは「違う」存在だった。

そこに存在するだけで、周囲すべてを否定してしまつものだ。

一目見れば恐れない者などいない。

それゆえにこそ魔物なのだと、サラサは心の底から理解した。

身体がガタガタ震え出しが、あまりの恐怖に声を上げることすら出来ない。

自分をしつかりと抱き留めるザンの腕から伝わる温もりだけが、サラサの正氣を支えていた。

……………つ――――――

突如、脳の中を直接引っかき回されるような、甲高く不快な高音を魔物が発する。

驚いたサラサが両耳を押さえ、ザンの顔を見上げると、ザンは多少顔をしかめていたいたが厳しい表情を崩さずに、眼光鋭く魔物を睨んでいた。

「うわあああっつっ！」

最初に吊り上げられた小男が悲鳴を上げた。

「――

すぐになにが起きるか察したザンが、サラサの顔を自分の胸に押しつけてその視界を塞ぐ。

小男は絶叫を上げたまま、内部にもびっしりと牙の生えた魔物の口の中に放り込まれる。

悲鳴が湿つたものに変わり、骨と肉をかみ砕きすり潰すおぞましい音が響き渡った。

悲鳴が途切れ、鳥肌が立ちそつた嚙下の音。

そのけしてけして短くはない時間、吊り上げられた残りの二人は、痴呆のようにポカンと口を開けて間抜け面を晒していた。

だが、魔物に血生臭いおぐびを吐きかけられ、ようやく正氣に戻つて喚き散らし始めたものの、それもすぐにぐぐりつて止む。

歯が碎けるのではないかと思つほど奥歯を噛みしめて、惨状を見つめるザンの視線を辿ったサラサの顔が一気に蒼白に変わる

ゆりゅりと揺れる触手の一本一本の先に、本体に比べれば小さい、サメのものに似た口が開いている。

喉元にそれががつぶりと食い付いた男一人の身体が、屠殺された家畜のように、数本の触手に支えられてぶら下がっていた。

「まさかこんなに早く現れるなんてな……」

一瞬で流血の現場に変わった状況に絶句しているサラサの耳に、ザンの咳きが届く。

独り言なのか、サラサに話してゐるのか、どちらともいえないザンの声には悔しさが滲んでいた。益体もないチンピラ連中とはいえ、目の前で人の命が魔物に奪われたことが許せないのだらう。

「……サラサ」

魔物の注意を引かないように、できるだけ小さく絞られた小声で

ザンがサラサに話しかける。

惨劇から田を離せないでいたサラサは、その声で我に返り、ザンに田を向ける。

絡み合った視線の先、ザンのその瞳には強い決意が浮かんでいた。何故か例えようもない悪い予感がサラサの胸に広がる。不安を押し殺しながら問い返す。

「……どうしたの？」

「……お前は逃げる。オレがあいつの相手をする」

「つ？！」

「……声を出すな。あいつの注意を引いてしまうつ

驚きの声を上げようとするサラサの口を素早く押さえ、魔物の動きをつかがつ。

魔物は新鮮な血の臭いに酔っているのか、微かに身を震わせて喉を鳴らしているだけで、今は動きを止めている。

「……どいつもあいつは音でものを判断してゐてえた。幸いといふか、人魚の子は気絶したまま、今のところあいつの注意を引いてない」

「やうだ、あの子、フランは？！」

口を押さえるザンの手を振り払って、辺りを見回す。

いた。

魔物を挟んで向こう側と言つていい位置。最初に殴り倒されて気絶したままのようで、立ち回っているうちに随分離れてしまった。

魔物とサラサ達にフラン。この三者の距離はほとんど変わらないが、フランに近づくには魔物の目の前を横切らなければいけない。まさか死んではないと思うが、今すぐにも駆け寄りたい衝動を抑えて、サラサはザンの顔を見る。

「……すまん、あの子を連れて下がる余裕が無かつた」

魔物が出てきたタイミングから言つても、その位置にしても、ザン達がフランの方に近寄ることは不可能だつた。フランは三者の中で一番海に近いところにいたのだ。無理して近づけば、海を背にして魔物と退治するはめになつていただろしが、ザンはサラサに頭を下げた。

サラサにしても、ザンの行動が間違つていたとは思わないが、だからといって今の危険が消えて無くなるわけではない。

今にも飛び出しそうな様子で、泣きそうな視線を倒れたままのフランに注ぐ。

「……サラサ、お前は逃げる。」これはオレの判断間違いだ。オレが責任を持つてなんとかする。だから……

「なんとか……ついてー。」

声が高ぶりそうになつたサラサは、ザンの身体が震えていたことに気がつく。

「……ザン……？」

「……やつぱバレたか」

無理に戯けて浮かべたザンの笑いは、はつきりと引寄せついていた。その顔をよく見れば、蒼白とまでは言えないまでも、かなり血の気が引いている。

問い掛けるサラサの視線に、ザンの笑いが苦いものになる。

「……押さえようとしたんだが、やつぱり無理だな。……正直に言おう。オレは一人で魔物と戦うのは初めてなんだ」

「……初めて?ー。」

「……魔物と戦うのが初めてってわけじゃない。師匠の支援で実戦をしたことは何度もある。師匠のお墨付きももらつた。ただ、一人で実戦つてのが初めてなんだ。……ついでに言えば、あんなでかい奴を見るのもな」

「……じゃあ、なんで戦つなんていつのよ?　あの娘を助けて逃げれば……」

「……わかつてくれ、サラサ。あの人魚を助けようとすれば、絶対にあの魔物の注意を引く。戦わないわけにはいかないだろう。それに、ここであいつを逃すと村に被害が出るかもしれない。見た目より、ずっと移動速度は速いみたいだしな」

それに、と眉根を寄せる。

「……情けないと思われても構わん。あいつと戦いながら、お前を守る自信が無いんだ」

「…………」

ザンの言葉に、サラサは一瞬驚いた顔をして、すぐに顔を伏せて肩を落とした。

「……だから、頼む。お前だけでも先に……」

「……ったのよ」

「なに?」

聞き取りにくく、ぼそりと聞こえた声に、ザンはサラサの顔を覗き込む。

瞬間、サラサはその細腕からは想像もつかない強い力でザンの襟元を捻り上げると、無理矢理ザンの顔を自分の目の高さまで引きずり下ろした。

同じ高さで、ザンの黒瞳がサラサの赤い瞳と絡み合つ。

「……わたしは、ザンに守ってくれなんて、頼んでない！」

瞳にある怒りの色と裏腹に、どこか泣きそつた声色だった。

「……ひとりにして、一緒にいてくれるって、約束してくれたじゃない……」

サラサの口から溢れる膨大な想いに、ザンの口が塞がれる。

「……わたしのことなんて、背負ってくれなくていい。だから……」

サラサが続けようとした言葉は、突然上がった悲鳴に搔き消された。

ザンが弾かれたように顔を上げると、田を覚ましたフランムが、縛られたまま悲鳴を上げながらなんとかもがいているのが見えた。

一田魔物を見た瞬間恐慌状態に陥ったのだろう、血の悲鳴が魔物の注意を引く可能性に気が付いていない。

魔物の巨大な頭が、ゆっくりとフランムの方を向く。

「フランム！」

「ち早く反応したのはサラサだった。

ザンの脇をすり抜け、稻妻のような速さで駆け出す。

魔物に恐怖を感じていなければいけないのに、その動きに迷いは無かった。

魔物の注意をフランムから逸らす為、大声を上げながら落ちていた
銛を拾い上げ、両手に構えて突撃する。

「サラサ？！」

その思い切りの良すぎるサラサの行動に、ザンが慌てて後に続いた。

声に反応してサラサに触手が殺到する。

ザンはサラサの前に飛び出し、気合いと共に淡い光を放つ長剣を一閃。

数本の触手がまとめて数本宙に舞い、どす黒い闇色の血液が飛沫く。

そこに生じた僅かな隙間にサラサが滑り込む。

「いやあああああああー！」

一際高い悲鳴が上がる。

触手の群の一部がフランムに巻き付き、枯れ木でも扱うかのように軽々と宙に持ち上げる。再び氣を失ったフランムの身体から力が抜けれる。

サラサは疾走の勢いを殺さず、全身の力と体重を乗せて魔物の胴体に銛を打ち込む。ブギが鍛えた銛は、柔らかいとは見えない魔物の表皮を貫き、しっかりと握った手元まで突き立つた。

魔物が甲高い怒りの声を上げる。

その隙に回り込んだザンが、フラムを捕らえた触手の根元を切り飛ばした。

宙に放り出されたフラムは、放物線を描いて運良く岩場から離れた海へと落ちる。

気を失っていたようだが、まさか人魚が溺れる事はあるまい。

こちらを敵と認識したのか、それもと苦痛からか、魔物が手放した男達の身体も、湿った音を立てて岩場に落ちる。

返しが付いている為、抜くことが出来ない鉛を手放して魔物から離れつつ、フラムが海に落ちるのを見届けたサラサは、安堵から一瞬氣を逸らしてしまった。

「サラサッ！」

ザンの呼びかけは遅かった。

サラサが、あ、と思った時には、暴れる触手の一本がその足を払つていた。

そして、動きの止まったサラサの太股に、横殴りに襲った触手の牙が深々と打ち込まれる。

そのまま宙に吊り上げられながら、灼熱の激痛にサラサが声にならない悲鳴を上げた。

頭の中が白熱して、サラサの意識が遠くなる。

突然、獣のような雄叫びが轟いた。

ザンだ。

サラサの姿を見たザンは、まるで竜巻のような勢いで魔物へ突進した。

凄まじい形相を浮かべるザンの動きには、一切の防御も、洗練された動きもない、死に物狂いの突進だ。

その目にはサラサしか映っていない。

無数の触手がザンに向かつて殺到する。

ザンは力任せになぎ払うが、触手の数が多くすぎる。払いきれなかつた触手が、ザンの身体にも次々と牙を打ち込んでいく。

それでも、ザンの目は魔物すら見ていなかつた。

ただ、サラサだけに向けられていた。

右肩と左足に食い付く触手を切り飛ばし、顔面を狙つてきた触手は首を逸らして避けようとするが、避けきれずに血飛沫が舞う。

額から流れる血が左目を真つ赤に染める。

ザンの身体に傷が増えていく。

それでも、ザンサ引く配を見せない。それだけか、その手こした長剣は脳しこぼじこ輝きを増していく。

まるで、生命そのものを燃やしていくように。

カラサは激痛に朦朧となりながら、血の匂い、魔物の返り血で赤黒くまだらに染まるザンを見た。

……どうして?

どうして、そんなに傷つくな?

あんなに震えてたへせ。

あんなに怖がってたへせ。

怖いなら、逃げればいいの。

わたしがいるから。

わたしのため?

逃げたって、わたしは、もう戻るだりしない。

もういい。

もういいから。

お願いだから逃げて。

掠れた声は、魔物と守人の怒号に搔き消される。

お願いだから……。

溢れた滴が宙に舞つた。

わたしのために傷つかないで……！

その時、小山のような魔物の身体が動いた。

後ろにだ。

ザンの気迫と、眩しく輝く破魔の光に魔物が引いた。

再び雄叫びが上がる。

それを迎え撃つため、すでに半分以下に数を減らしていた魔物の触手が、雪崩を打つてザンへと向かう。

ザンは光り輝く剣を大きく振りかぶり、裂帛の気合いと共に触手の群に叩きつけた。

光が炸裂し、爆音が響き渡る。

触手の群の半分が吹き飛んでいる。そのまま向こうに、魔物の身體がある。

だが、ザンの両手もまた、内側から破裂したような傷で真っ赤に染まっていた。

自らの血で滑る柄を握りしめたザンは、振り絞るような動きで間合いを詰め、渾身の斬撃を魔物の胴体に見舞つ。

破魔の光をまとった剣はその身体を易々と切り裂き、魔物の喉からはつきりとした苦鳴が吐き出される。

魔物は身体を震わせ、身体を支える凶悪な足をザンに振り下ろす。

ザンが返した刃は、それをも簡単に切り払つた。

魔物は怒号と苦鳴をまき散らしながら、さりにザンを頭から飲み込もうと、その強大な顎を開いて襲いかかる。

振り切つた剣を引き戻し、腰溜めに刺突の構えをとつたザンは、津波のように襲いかかつてくる魔物の口を睨みつけた。

流れ込む血で半分赤く染まつた視界の中。

虚空のような魔物の口の奥、そこに血走り濁んだ巨大な眼球をザンは見た。

一際高く、両者が吠える。

交錯。

すべての音が、波の音すら止まつたかに見えた。

ザンの長剣は、その顎がザンの身体をかみ砕く前に、喉の奥の眼球を貫いていた。

魔物の絶叫。

そして、断末魔の暴走。

すべての力を使い果たしたザンは、為す術無く吹き飛ばされた。

長剣が手から離れる。

魔物は海に逃げようとしていた。

魔物は、まだサラサを放していなかつた。

ザンの目が、サラサを捉える。

サラサは、ザンを見つめていた。

青年の眼は、血で霞んでいた。

少女の眼は、涙で濡れていた。

手を伸ばせば届く距離。

二人の視線が絡む。

青年は最後の力で、手を伸ばした。

少女もそれに答えるように、手を伸ばした。

青年の手は、限界まで伸ばされる。

少女の手は、限界まで伸ばされなかつた。

一つの手が、その先だけを擋めて、離れる。

青年は、少女の名を呼んだ。

少女は、それを聞いた。

怒濤がすべてを飲み込んだ。

* * * * *

『ちえつ、なんだつてんだよ

少年は、十歳になるかならないかくらいだろうが。肩を怒りさせて、

木々の間の小道を一人で歩いていた。

『いいじぶりつ』のブギはともかく、ナオまでなんだつてんだよ』

子供のくせに妙に分別臭い幼馴染みと、一つ年下の、自分がいくところにはどこにでもついて来たがる女の子の顔を思い浮かべる。

元々は自分が言い出したことだ。

村から少し離れた小屋に、魔物の子がいる。だから近づいてはいけない。

それは、村の子供が大人達に必ず言い含められることだったが、少年は年相応の好奇心を發揮して、だつたら肝試しをしようと dijo出了した。

なんでそんなことを思いついたのかはわからない。

強いて言えば、大人達が「やるな」と言つてゐるからだと思つ。

そんな大して意味のない思いつきを一人の幼馴染みに話したのだが、返ってきたのは否定的な態度だつた。

ブギがそういう態度をとることははある程度予想していたが、ナオまで強硬に嫌がつたのは、少年にとつて意外だつた。

意地を張つて、だつたら自分一人でいくと歩き出しても、二人はついてこなかつた。

『そり後ろをつかがうと、ブギは呆れたような顔をしていたし、

ナオは迷つてこらぬうだつたが、結局つじこになかった。

少年は、やけくそと見栄だけで歩いた。

しばらべ林の中の緩い坂道を歩くと、粗末な作りの小屋が見えてくる。

少年のまだ細い喉が「ゴクリ」と動く。

正直に言えば怖い。

そのまま帰つても一人は見てないわけだし、どうとでも誤魔化せるのでないか。

少しだけそんなことを考えたが、それはひどく卑怯な真似に思えた。

しかし、やはつといつか、怖いものは怖い。

小屋の手前で木の陰に隠れて様子をつかがつ。

『ねえ

しばらべそんなふうにアーリアヒーした少年の背後から、不意に声がかかつた。

あまりの驚きに、悲鳴を上げて少年は飛び上がった。漏らさなかつたのが不思議に思えるほど驚いた。

びくびくしながら振り向くと、布を頭からすっぽり被つた、少年

より小柄な人影が立っていた。

『なにか、よひ?』

女の子の声だ。

感じからすると、ナオと回じへりいかな、と少年は思った。

そして、どう答えたらいか悩んでいたが、どうぞ少年の思考は煮詰まつていく。

答えない少年を訝しく思つたのか、布の少女は首を傾げたようだつた。

『ねどりつても、ぬかあさんも、いま、でかけてるよ?』

言ひながら、ずれた布を不器用な手つきで直そうとする。

『あ……』

するり、と被つた布が地面に落ちた。

少年は今度こそ心臓が止まつなくなつた。

布の下から現れたのは、月光を固めたような白銀の髪と、血よりも紅い瞳をした女の子。

「の子がそなだ!」

驚きに田を見開く少年の前で、女の子は慌てて布を拾い上げて被

り直し、ゆづくと少年の方を振り向いた。

『……あなたは、にげないんだね?』

心底意外そうな声だった。

『え?』

思つてもいないことを言われて、今度は逆に少年の方が首を傾げる。

確かに見た時には驚いたが、怖いとか恐いよりも、むしろその美しい方に少年は目を引かれたし、その女の子のどこか奥の方に、引かれるなにかを感じていたのだ。

ただ、やはりそれは言葉にするには難しそうで、悩みつつまた黙り込んでしまう。

しばしそのまま一人で突っ立っていた。

やがて、女の子は被っていた布を肩まで下ろして、少年に向った。

『あたし、サラサ。あなたは?』

『へ……?』

『あなたの、なまえ』

無表情な深紅の瞳が少年を見つめる。

少年は慌てて答えた。

『あ、ほ、ほくのなまえはザン。ザンだよ』

無表情だった女の子の顔に、表情のよつたものが浮かぶ。

『かつこいこ、なまえだね』

自分の名前が褒められたこと、少年はしばらく気がつかなかつた。

小首を傾げる女の子を見て、ようやく何を言われたのか理解して、いつそう慌てて返す。

『え、あ、ありがと。……あの、あ、きみのなまえ、サラサラだけ、……すじぐ、きれいななまえだとおもう、よ』

真っ赤になりながらザンが言つた言葉に、サラサラなまえといづれくりした顔をすると、その白い頬を赤く染めて、ほつきりと微笑みを浮かべた。

『……ありがと』

ザンは一回でその笑顔に魅せられた。

そして、その笑顔を守りたいと心から思った。

本当に、心から思った。

波の音が、遠くに聞こえた。

終章・円と潮騒

暗闇の中で、ザンは田を覚ました。

ゆっくり起き上がり、周りを見回す。

すでに一月以上を過ぎた粗末な小屋の中は、相変わらずすめぼしい家具は何もなく、小屋の真ん中にある炉の中にくすぶる薪の燃えさしだけが、ここで人が生活していることの証だった。

その寒々とした雰囲気は、すでに秋に向かい一つある季節が見せる錯覚ではないだろう。

こまだに慣れることができない、絶望的な孤独感に身を震わせる。

ザンがすべてを失ったあの夜から、一ヶ月以上が経っていた。

あの日、魔物が海に飛び込んだ時の波にのまれて意識を失い、気がついた時には朝日が降り注ぐ岬の岩場で倒れていた。

すぐさま跳ね起きて辺りを見回したが、朝日の照らす岬は、そこで起こったことの片鱗も見せず静まり返っていた。

誰も、何もなかつた。

そこでザンは、魔物との戦いで瀕死になつてもおかしくない負傷が、ほとんどふさがつてゐることに気がついた。

傷が無いわけではない。新しい傷は増えている。

傷に残る軽い引きつれだけが、負傷していたのが現実だと物語っている。それがなければ、すべて夢だったのではないかと思うほどだ。

そう、現実だったのだ。

蒼白な顔で辺りを見回す。

見つかることはすがない、と頭のどこかで解っていた。

それでも、認めることなど出来なかつた。

探した。

探して、探して。

太陽が中天を過ぎ、空を明るく染めて沈んでいつても。

いくら探そうが、見つかりはしない。

救えなかつたのだから。

守れなかつたのだから。

満天の星空の下で呆然と星を見上げる。

それから一度田の朝日が昇るの見て、小屋に足を向けてた。

ひょっとしたら、戻っているかも知れない。

だが、そんな淡い希望を打ち砕くよつに、ザンを迎えたのは無人の空間だつた。

次にすべき行動を見つけられずに立ち尽くし、そこで初めて長剣を失つたことに気がついた。

顔を見せないことを不審に思つたブギが尋ねてきたが、ザンの様子を一目見ただけで何があつたのか大体のことを察した。

ブギはザンに掛けるべき言葉もなく、黙つて立ち去つていつた。

その日の夜は嵐だつた。

嵐が過ぎ去つた村近くの浜辺に、魔物の死体が打ち上げられた。ザンと戦つた魔物だ。

だが、失つた長剣はもちろん、そんなものよりも遙かに大切なものは、見つからなかつた。

長剣は守人の身分を証明するもので、それがない限りザンは守人とは認められない。不注意からの紛失は処罰の対象になるが、魔物との戦闘で失つたということで罰はなく、新しいものが届くまで、ザンは休養ということになつたと、ブギがしばらくして伝言に来た。

それから今までのことを、ザンはよく覚えていない。

色々あつたような氣もするし、何もなかつたような氣もある。

ブギ夫婦は、放つておくと搜索に出て食事もろくに摑らぬザンを心配してよく顔を見せてくれていたし、婆様からの伝言もよく伝えに来てくれていた。

ナオは、あの夜以来姿を見ていない。

しばらく経つて、ブギからナオは勉強の為に村を出たとだけ聞かされた。

ザンの家族には、魔物との戦いで怪我をしているから、療養しているとブギが伝えてくれたらしい。

だが、それもこれも、ザンにとっては覚えている価値などない。

起きて、探して、寝る。

たまにブギなりヨナなりが持つてきてくれた食料を、勧められるままに口にすることはあったが、それ以外は食事もろくにしなかつた。

単調な繰り返し。

こつそのこと、終わらせてしまつてもよかつた。

それをしなかつたのは、僅かな可能性でも、あの少女が帰つくるという希望に縋つっていたからだ。

可能性など、無いに等しいのは解っている。

もし無事なら必ず小屋に帰ってくるだらうし、ビルとかで怪我をして移動できなかつたのだとしても、もつ戻つてこなければおかしい時間が経つている。

光のない瞳で小屋の中を見回したザンは、ふと虚空を見上げ、寝床から立ち上がった。

小屋から出ると、夜氣を含んだ風が吹いていた。

夏はすでに過ぎかけ、虫の音が響く夜はひんやりとした感触をザンの肌に残す。

真円を描く月が夜に掛かっていた。

白く濁りのない光が、夜道を照らしている。

ボンヤリと、子供の頃、夏の終わりの満月が見える夜は外に出ではいけない、と村の大人に言われたことを思い出す。

その夜に外に出たものは、死者の魂に連れ去られる、といったのだった。

ザンの心にやせや波が立つ。

なにかに呼ばれるような、そんな感覚があった。

ザンはゆっくりと足を踏み出した。

人魚の岬。

足の赴くまま歩いて、ザンはあの日の場所へと向かっていた。

「？」

岬の突端。

ザンは自分の目を疑つた。

だが、頭がそう思うのとは裏腹に、身体は即座に反応する。あの日以来、腑抜けていた身体へ急速に活力が満ちていく。

走つた。

あの夜、戦いのあつた岩場。その波打ち際に、月光が形を取つたよつな姿はあつた。

星色の髪を持ち、背中を向けて座つてゐる月の光は、紅玉の瞳を持つてゐるはずだった。

「……」しばらくの不摂生がたたつたのか、目的の場所に着いた時は、すぐに言葉が出ないほど息が乱れていた。荒い息をつきながら言葉を探す。

言葉が口から出る前に、月の光が振り向かず口を開く。

「……来たんだね

「サラサ……」

サラサは満月の光が降り注ぐ下、一糸まとわぬ姿で精緻な螺鈿細工の鞘に入った長剣を抱き、海の方を向いて岩に腰掛けている。

「…………生きて、いたんだな……」

掠れた声で、なんとか言葉を絞り出す。語尾が湿った。

「…………ちゅうど良かつた、始まるよ」

ザンの言葉に応えるでもなく、不思議なほど静かな声で言つて、サラサが海を指す。

「始まるって…………？」

なにが、そう言いかけた時だった。

波の少ない静かな海に、小さな光がぼつんと現れる。

それは見る間に爆発的に広がり、あつという間に海面を覆つていく。

まるで光の草原が広がっているような光景だった。

やがて、光の粒が一つ海面から浮き上がった。

それを追うみゆこ、一つ、また一つと天へ舞い上がつていいく。

海に向かつて吹く風が、その光を海の方へと流す。

その光が見せる景色は、暖かく、どこか哀しみを感じさせた。

唐突に訪れた荘厳な光景に、ザンは惚けたように天を仰いでいた。

「昔の人は、この光を死んだ人の魂だと思ったらしいね」

相変わらず海の方を向いたまま、ぽつりとサラサが呟いた。

「天に昇れなかつた光は、海に落ちて真珠になるつて。ザンはその話、知つてるか」

村に伝わる昔話の一つだ。村の人間ならみんな知つてゐるだろう。サラサの表情は、ザンからはよく見えない。声にも感情が感じられないがつた。

「でも、これつて、そんな不思議なものじゃなくて、海の生き物の産卵なんだつてさ。フランが言つてた」

魂と卵の違いはあるが、先人はそこに同じく生命を見出していたのだろう。

正体を知つたところで、その光景の価値は減じることはなく、むしろザンの感慨を深くした。

言葉が途切れ、波の音だけが流れ、光の河はゆるゆると流れいく。

「……ナオは、元気にしてる？」

突然の質問に、ザンは言葉に詰まつた。

サラサはナオが何をしたのか知つているのだろうか。相変わらず感情が見えない声で判断がつかず、慎重に言葉を選んで答える。

「少し前に、央都に行つたよ。本格的に詠人の勉強をするんだってや」

結局ザンはナオとは直接顔を合わせていなかつたが、直接聞いた風を装つ。

「そり……」

短く言つて、サラサは再び黙り込む。

光と風の舞は、一切の音を発することなく、波の音だけを背景に繰り広げられている。

そのあまりにも幻想的で現実感の希薄な雰囲気は、少しの雜音だけでもすべてが消え去つてしまいそうだつた。

いつまでも魅入つてしまいそうな状景から、サラサに目を移したザンは、その細い肩が震えているのに気がついた。

「サラサ？」

「…………なんで、なんできたのよ…………？」

途切れ途切れの言葉は涙に濡れていた。

「……今日、会えなければ、諦めるつもりだったのに。……会っても、辛くなるだけだって、もつと辛い思いさせるだけだって、……解つてゐるのに……。わたしは……馬鹿だ」

漏れる嗚咽に喉を詰まらせながら虚空へと言葉を紡ぐ少女に、ザンは正面にしゃがみ込んでその細くひんやりとしたサラサの両肩にそっと両手で触れる。

華奢なその感触は、ザンにとってはまことにした実感、また触れたいと願った感触だ。

「無理に喋らなくていい。後でいくらでも話せる。お前が生きててくれたってだけで、オレには十分だよ。とにかく、そんな格好じゃ身体が冷える。一度小屋に戻ろう」

なぜか胸を差し始めた嫌な感覚を押し込めつつ、サラサの肩を抱いて立たせる。

「ザン」

名前を呼ばれただけだとこいつに、その刃物のような真剣をこじんは動けなくなつた。

サラサは俯いたまま、螺鈿の鞘^{イリ}と長剣をザンの胸に押しつけ、そつと身体を離した。

「わたしは、いけないよ」

言葉がザンの心臓を掴む。

半ば予想していたような、あらかじめ決まっていたような、まったく予想もしない言葉を聞いたような、名状しがたい感覚がザンの心中に広がる。

「…………え？」

口の中が乾いていくを感じながら、なんとか言い返す。

不安に耐えきれず、すがるよつて、長剣を押しつけるサラサの手に自分の手を重ねる。

「あの夜」

ぱつりとサラサが離く。

光の河は、いつの間にかその尾を海から放していた。

「怖い魔物と戦ったね……。傷だらけになつても、戦つてくれたね……。わたしの……ためだつたんだよね。わたしがいなれば、逃げてたよね」

そうだ、とも、違う、とも言へず、ザンは言葉に詰まる。

「魔物……怖かった。でも、ザンが傷ついて、いっぱい血を流して、死んじやつんじゃないかつて……。その方がずっと怖かった……。でもね」

その時の恐怖を思い出したのか、サラサの身体が少し震えた。

「わたし……その時、どう思つたか判る……？……嬉しいって思つたんだよ」

罪人がその罪を告白するかのように、悲痛な響き。

「……ザンがあの時死んじゃつたとしても、わたしはそういう思ったのかもしない。……この先、同じようなことがあって、やうなつたとしても……多分、きっと、わたし、やう思つ」

ぼりぼりと、光る粒がいくつも俯いたサラサの顔から地面に落ちる。哀しく乾いた笑いが、その小さな唇から漏れる。

「ザンが、わたしを置いていくことになるの……きっと、そう思つちやう。……わたしは、本当に魔物なのかもね……？」

「そんなことひ……ー」

かける言葉を思いつけない。想いはザンの胸に溢れているのに、言葉といつ形になつてくれない。

重ねた手に力を込めても、その感触はひどく頼りなかつた。

そつと、サラサは自分の手に重ねられたザンの手に、さらに自分で手を重ねる。

傷だらけの青年の手。

過日の夜、あんなにも愛しかつたそれが、今はひどく哀しかつた。

「あの夜から、ずっと、ずっと、言いたかった……」

顔を上げたサラサと、ザンの視線が絡む。

少女の顔に浮かんでいたのは、涙に濡れた笑顔。

再会を果たしてから、ザンが初めて見る笑顔だった。

だが、それはザンが見たいと願い、守りとした笑顔ではなく。

「……ごめんね。それと……」

なにかを諦めてしまった者の笑顔。

す、とザンに近づき、動けないザンの胸に手と自分の胸を重ね、
すぐに離れた。

「ありがとう」

なにかと捨てようとしている者の笑顔。

手のひらからじろぼれ落ちる砂を受け止めるように、反射的に動いたザンの腕をするつと抜けて、サラサは光の残滓が残る夜の海に身を躍らせた。

「サラサっ！」

それを追おうとしたザンの目の前で、突然光が弾けた。

「……くつ?...」

不意のことに注み、眩む田をひすつて少女の姿を探す。

そして、見た。

満月を背景に、虹色こきりめへ尾ヒレを持った月の光が、高く高く海から飛び上がるのを。

それは、あまりに冷たく、あまりに哀しい線を宙に描き、海へと落ちた。

まるで、月がこぼした涙のよう。

ザンは、ただ呆然とそれを見送った。

やがて、光の河が流れゆき、光の残滓も消え去つて。

月光だけが照らす、いつもの海に戻つても。

残された長剣を胸に抱いて、青年はそこに立ち続けていた。

ずっと。

……ずつ。

月は輝き、潮騒は語りだ。

こままでも。

そして

これからも。

Hペローグ

「いま帰った」

入り口の織物を除けて顔を見せたのは、鍛え抜かれ、生活に磨かれた精悍な体躯の男だ。

「おとうさん！」

その顔を見た途端、幼子 小さな女の子は、跳ねるように立ち上がって、に駆け寄った。

「おかえりなさい！」

「ただいま」

男は愛情たっぷりの笑顔を満面に浮かべてしゃがみ込み、女の子を受け止めた。

「遅かったのね」

その様子を暖かな眼差しで眺めながら、小柄な女が男に歩み寄る。敷物の隙間から差し込んだ月光が、女の髪を同じ色に輝かせた。

「心配したのよ？」

「すまん、ちよつと事後処理に手間取つてな。帰り際までドタバタしてたんだよ。土産を調達する暇もなかつたし、悪かつた」

「いいえ。あなたが無事なら、それ以上必要ないよ」

するり、と男と女は、優しく纖細にその身体を擦り合わせる。まるで、鹿のつがいがやさしく、愛情溢れる仕草だった。

今この時間が、どれだけ貴重で幸せなことであるのか、知つているのだらう。

言葉など無くとも、ここにはいくつもの時間と経験を経、何度も繋ぎ直してきたのであらう、強固な絆が目に見えるようだつた。

「なにか、あるのか？」

「わかる？」

「まあ、それくらいはな。なにかは知らんが……」

男は苦笑にして顎を搔く。

「今日、婆様のところに行つて、確認してきたんだけど……」

女は、皿の下腹部に手を当て、恥ずかしげに微笑んだ。

「多分、間違いないって」

「なに?...」

すぐこの意味を察した男の顔が、みんなのつむじに喜色に染まる。

「そうか……！ オレが十産貢つてんじゃ、ますます申し訳ないなあ」

男は嬉しそうに女を抱きしめると、恥じらいに少し俯く女の額にそっと自分の額を当てる、そっと顔を上げさせると、そのまま優しく唇を重ねる。

「おどりのあと、あたしも!..」

足にじがみついて、ぴょんぴょんと飛び跳ねつつ、女の子が催促する。

笑しながら頷いて女の子を抱き上げ、顔を寄せせる。

ところが、女の子はそれをするりと避けて、男の顎に口づけた。

「あたし、これすき!..」

男の顎にある傷に指先で触れながら笑顔を浮かべる女の子に、唇を避けられたことで微妙な顔になっていた男の顔も笑み崩れる。

そして、女の子を下ろすと、しゃがみ込んだまま、すぐ側の女の下腹部に頬を押し当てる。

「次は、男の子がいいかな?」

「どうでもいいが、元気で生まれてくるなら」

女の問いに答えながら、男は口を閉じた。

「早く生まれてこい。辛い」ともいつぱいあるかもしけんが、きっとそれ以上に幸せなことが、きっとある。待ってるぞ」

まだ見ぬ我が子に語りかける男の顔を眺める女の顔には、幸せが溢れていた。

「お腹はすいてない？　なにか食べてきた？」

「いや、さつきも言つたが、バタバタしてたんでな。腹ペコだ」

「じゃあ、残り物で悪いけど、少し暖めるね」

微笑んで、炉の方を向いた女の瞳が、炎を照り返して紅く輝いた。

「ほら、ここは外の風が当たる。火の側へいけ」

「はーい」

火の側で作業を始めた女のもとへいく姿を眺め、男は入り口の敷物を整え、腰の長剣を螺鈿の鞘ごと抜き、自分も火の側へ寄つた。

夜の空には月が掛かり。

散りばめられた星々の囁きのよつと、潮騒が遠く聞こえてくる。

了

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1989p/>

月と潮騒

2010年11月28日23時00分発行